四戸橋遺跡調査報告書

―　青森県営後潟地区かんがい排水事業に基づく
四戸橋遺跡発掘調査報告書　―

１９８３

青森市教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和57年度に実施した、青森県営後潟地区かんがい排水事業に基づく事業区域内四戸橋遺跡調査報告書である。
2. 本文の執筆は、塩谷隆正、小笠原幸範、高坂一夫が行い、編集は小笠原幸範が行った。
3. 遺物の復原・実測及びトレースは、小笠原幸範、高坂一夫、豊島紘美、佐藤玲子、佐藤ゆかり、写真撮影は、小笠原幸範、高坂一夫が行った。
4. 各項目の分担執筆に対する文責は、各々の文末に記名した。
5. PL図版は縮尺不同である。

図版・PL 図版目次

図 1　四戸橋遺跡位置図 ･････････････････････････ 1
図 2　基本層序 ･････････････････････････････････ 2
図 3　遺構配置図 ･････････････････････････････････ 3
図 4　第 1・2 号住居跡・出土遺物 ･････････････････････ 4
図 5　第 1・2・4・6 号埋設土器 ･････････････････････ 6
図 6　第 3・7・8・14 号埋設土器 ･････････････････････ 8
図 7　第 5・9・10 号埋設土器 ･････････････････････10
図 8　第 11 ～ 13 号埋設土器 ･････････････････････ 11
図 9　第 15 ～ 17 号埋設土器 ･････････････････････ 12
図 10　第 3・6・8・11・13・14 号埋設土器実測図 ･･････ 13
図 11　遺物出土状態・第 10 号埋設土器出土石器
　　実測図 ･････････････････････････････････････15
図 12　第Ⅲ群土器実測図 ･････････････････････････23
図 13　三角形・円盤状土器製品実測図 ･････････････････25

PL 図版

PL　1　発掘風景、第 1 号住居跡、第 1・3・7、11 ～ 13
　　号埋設土器 ･････････････････････････････････27
PL　2　遺物出土状態 ･････････････････････････････28
PL　3　後期包含層遺物出土状態 ･････････････････････29
PL　4　第 1・2 号住居跡出土遺物 ･････････････････････ 30
PL　5　第 1 ～ 9 号埋設土器 ･････････････････････31
PL　6　第 10 ～ 14・16・17 号埋設土器、第Ⅰ群土器 ････ 32
PL　7　第Ⅰ群、第Ⅱ－ 1 類 ･････････････････････33
PL　8　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････34
PL　9　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････35
PL10　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････36
PL11　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････37
PL12　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････38
PL13　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････39
PL14　第Ⅱ－ 1 類土器 ･････････････････････････40
PL15　第Ⅱ－ 2 ～ 6 類土器 ･････････････････････41
PL16　第Ⅲ群土器 ･････････････････････････････42
PL17　第Ⅲ群土器 ･････････････････････････････43
PL18　第Ⅲ群器 ･････････････････････････････44
PL19　第Ⅲ群土器 ･････････････････････････････45
PL20　第Ⅲ群土器、文化遺物 ･････････････････････46
PL21　第 10 号埋設土器出土石器、遺構外出土石器 ･････47

図　1　四戸横遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の基本層序（図 2）

本遺跡における基本的層序はＥ－10 区からＴ－10 区までの縄文時代前、中期土器包含層とA―10 区からC―10 区までの縄文時代後期土器包含層の２つに分けることができる。

北側の前期、中期包含層では大別して第Ⅰ層から第Ⅵ層まで分けることができた。第Ⅰ層は表土。第Ⅱ層は黒褐色で、この層より遺物包含層である。遺物の出土状況は後期及び中期の破片がまばらな状態であり、まとまった出土遺物はない。第Ⅲ層は黒色土。本層より埋設土器及び円筒上層ｅ式土器が伴う住居跡が確認された。比較的砂質である。第Ⅳ層では円筒下層式土器の出土がみられた。第Ⅴ層、第Ⅵ層は粘土質ロームである。

南側Ａ－10 区からＣ－10 区は第Ⅰ層から第ＸＸⅥまで大別することができる。第Ⅰ層は表土であるが第Ⅱ層より順次交互に白色火山灰及び川砂が堆積している状態で、これが第ＸＸⅣ層まで続く。後期の遺物は第ＸＶ層より第ＸＸⅡ層までの間に集中して出土している。第ＸＸⅡ層下より第ＸＸⅢ層にかけて大礫がかなり出土しているため、この層はＥ－10 区、第Ⅱ層に続くものと思われる。第ＸＸⅣ層から第ＸＸⅥ層は粘土質火山灰である。

本区域に関しては火山灰、あるいは川砂の堆積状態から古代河川の氾濫原と思われるため、各出土土器の層位的把握は不可能であった。　　（高披　一夫）

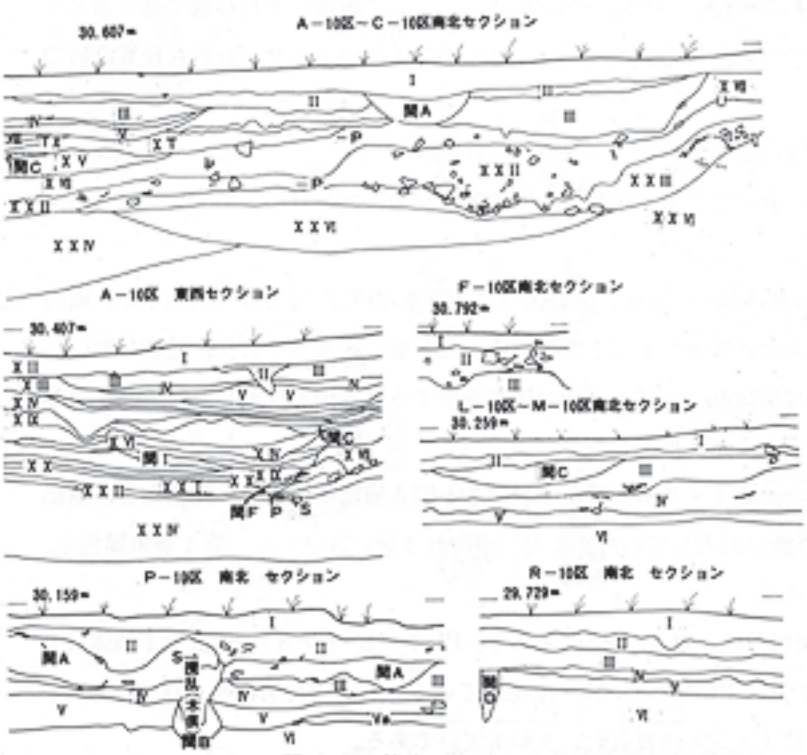


図　2　基本層序

III　縄文時代の遺構と遺物

1　検出遺構

図　3　遺構配置図

住居跡

第１号住居跡（図４、４－１・２、PL4－１～４）

〈位置と確認〉　F－10グリッドに位置し、第Ⅳ層において確認した。

〈規模・形態〉　約$^{1}/_{4}$程度しか確認できなかったため規模は不明であるが、形態は円形を呈するものと思われる。

〈施設〉　中央部に落ち込みがみられたが、全容を知り得ないため炉かどうかは不明である。

〈覆土〉　６層に区分した。第１～５層黒褐色土、第６層暗褐色土である。全層に炭化物が混入し、自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉　第１層で口縁部に小孔がめぐらされ、地文が無文の縄文時代後期の壷形に近い深鉢形土器（PL4－1)、床直では縄文時代中期の口縁が４波状を呈し波状部にボタン状突起及び小孔を持ち、口縁部が折り返し口縁で、折り返し部にRLの圧痕が施文され、地文がRLの横位回転のもの（PL4－2）が出土している。他にPL4－３がしている。また石器ではサイドスクレイパー（図４－1）や、剥片接合資料（図４－2）が各１点出土した。石質は珪質頁岩である。

第２号住居跡（図４、４－３～６、PL－４－５～18）

〈位置と確認〉　L・M－10グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認したが、南側は路線外のため不明である。

〈規模・形態〉　全容は知り得なかったが、調査区内における規模は（2．12）×2．75mで、楕円形を呈すると思われ、壁高は約30cmである。床面は中央部が堅くしまっており、壁際は軟い。

〈施設〉　遺構ほぼ中央に57×46cm、深さ9cmの円形を呈する竪穴炉を検出した。また、東壁寄りに柱穴と思われるピット１基を検出した。

〈覆土〉　４層に区分した。第１・２層黒褐色土、第３・間A層暗褐色土で、炭化物を多量に混入し、第２・３層では骨粉が混入していた。また、炉内は２層に区分した。第１層黒褐色土、第２層にぶい黄褐色土である。

〈出土遺物〉第２層で復原可能土器３個体（図４－6、PL4－５・6、8)、床直で１個体（P4－7）が出土した。また他にPL4－９～15が出土している。石器は有柄石鏃３点（図４－３～5）が出土した。石質は３・５が珪質頁岩、４が玉ずいである。

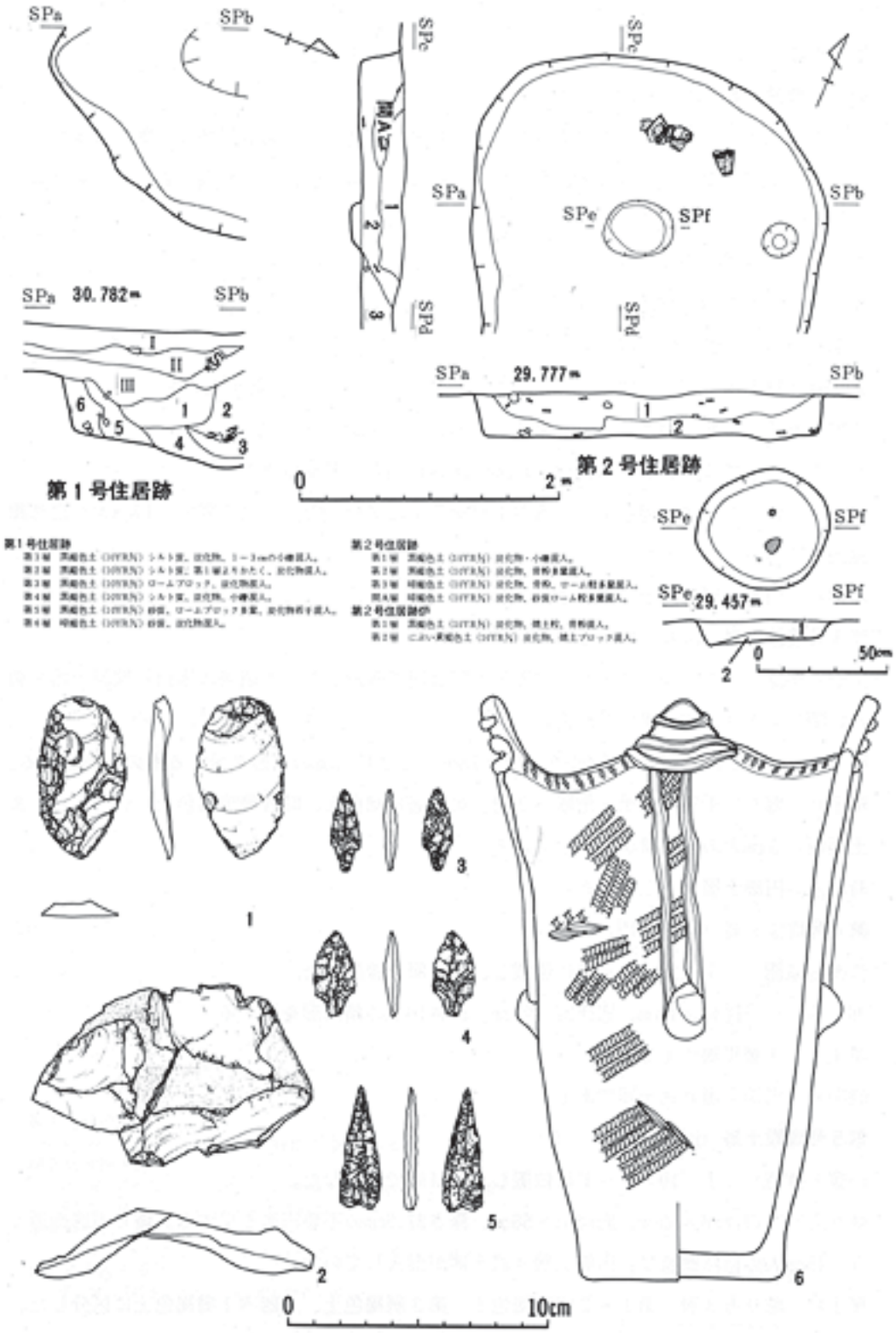


図　4　第1・2号住居跡、出土遺物

埋設土器

第１号埋設土器（図５、PL－５－１）

〈位置と確認〉　L－10グリッドに位置し、第㈱㈱層で確認した。第６号埋設土器と近接している。掘り方は確認できなかったが、直立しているという事から、一応埋設土器として取り扱った。

〈掘り方〉　確認できなかった。

〈覆土〉　土器内１層黄褐色土である。

〈時期〉　円筒上層ａ式土器である。

第２号埋設土器（図５、PL5－２）

〈位置と確認〉　F－10グリッドで確認し、第㈱㈱層で確認した。

〈堀り方〉　口径27×24㎝、底径13×11㎝、深さ16㎝の円形を呈する。

〈覆土〉　掘り方１層暗褐色土、土器内１層褐色土に区分した。また土器内に10㎝大の自然礫が混入している。

〈時期〉　円筒上層ａ式土器である。

第３号埋設土器（図６、10－１、PL5－３）

〈位置と確認〉㈱－10グリッドに位置し、第㈱㈱層で確認した。本遺構は第14号埋設土器と切り合い関係にあり、本遺構の方が古い。〈掘り方〉　口径23×（21）㎝、底径（19）×18㎝、深さ11．1㎝の円形を呈するものと思われる。

〈覆土〉　堀り方１層褐色土、土器内２層、第１層暗褐色土、間Ａ層暗褐色土に区分した。また土器内に5㎝大の自然礫が混入している。

〈時期〉円筒上層ａ式土器である。

第４号埋投土器（図５、PL5－４）

〈位置と確認〉㈱－10グリッドに位置し、第㈱㈱層で確認した。

〈掘り方〉　口径48×40㎝、底径27×23㎝、深さ16㎝の楕円形を呈する。

〈覆土〉　１層黒褐色土である。

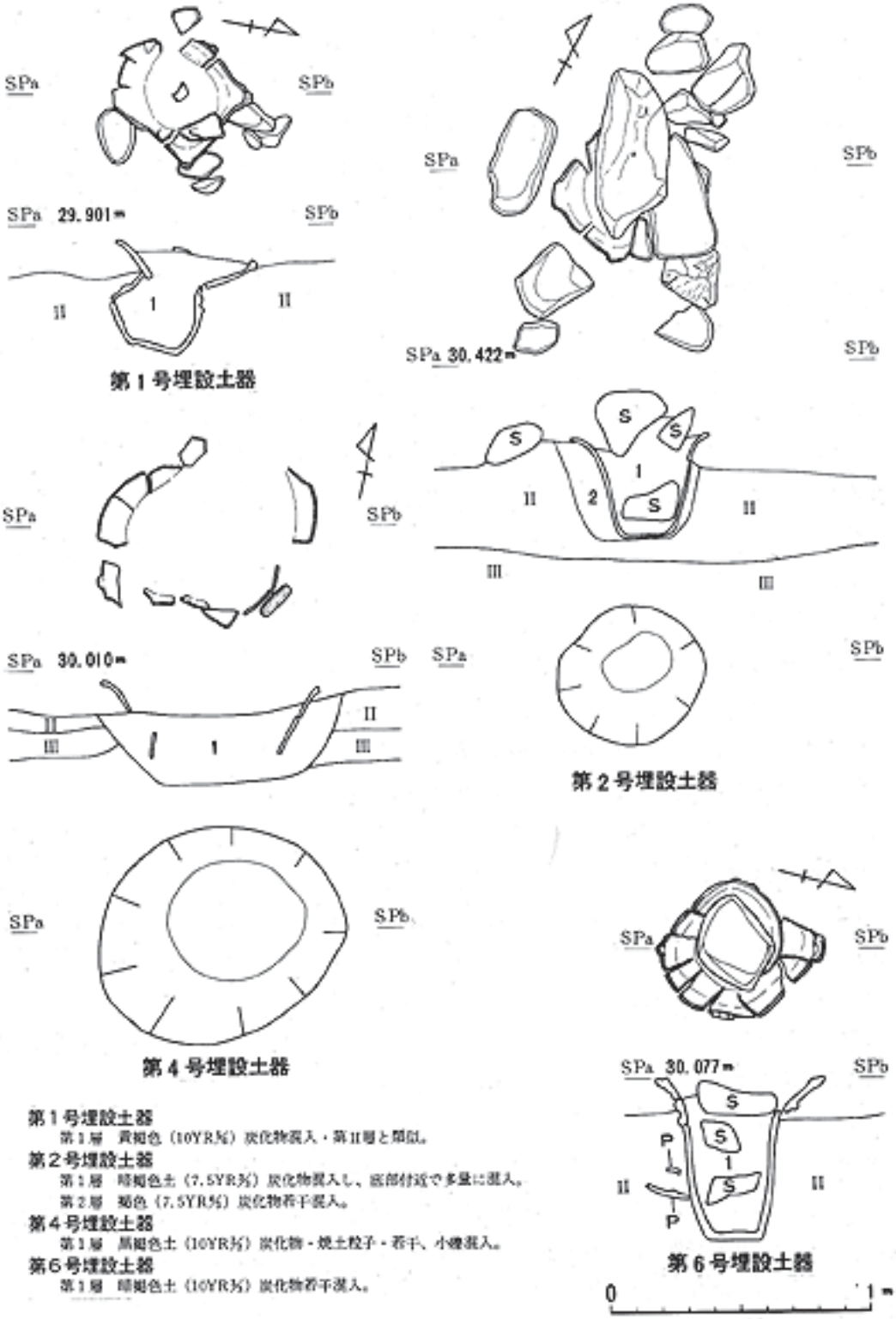
〈時期〉　円筒上層ｅ式土器である。

第５号埋設土器（図７、PL5－５）

〈位置と確認〉　∫－10グリッドに位置し、第㈱㈱層で確認した。

〈堀り方〉　口径86×83㎝、底経61×56㎝、深さ27．5㎝の不整円形を呈する。堀り方底面近くに５～15㎝大の自然轢及び、円筒上層ａ式土器が混入していた。

〈覆土〉　堀り方３層、第１・２層暗褐色土、第３層褐色土、土器内１層褐色土に区分した。
また砂質ロームブロックが堀り方に混入、土器内に5㎝大の自然礫が混入していた。



第1号埋設土器
第1層　黄褐色（10YR5/6）炭化物混入・第II層と類似。

第2号埋設土器
第1層　暗褐色土（7.5YR3/4）炭化物混入し、底部付近で多量に混入。
第2層　褐色（7.5YR5/6）炭化物若干混入。

第4号埋設土器
第1層　黒褐色土（10YR3/2）炭化物・焼土粒子・若干、小礫混入。

第6号埋設土器
第1層　暗褐色土（10YR3/4）炭化物若干混入。

図　5　第1・2・4・6号埋設土器

〈時期〉　円筒上層ｃ式土器である。

第６号埋設土器（図５、10－２、PL5－７）

〈位置と確認〉　Ｌ－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。第１号埋設土器が近接している。掘り方は確認できなかったが、第１号埋設土器同様直立している事から埋設土器として取り扱った。

〈堀り方〉　確認できなかった。

〈覆土〉　土器内１層暗褐色土である。また、フタをしたような状態で29㎝大の自然礫がみられた。

〈時期〉　円筒上層ａ式土器である。

第７号埋設土器（図６、PL－５－６）

〈位置と確認〉　Ｌ－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。

〈堀り方〉　口径38×34㎝、底径14×12㎝、深さ22．2㎝の円形を呈する。

〈覆土〉堀り方２層共に黒褐色土、土器内３層、第１・２層暗褐色土、第３層黒褐色土に区分した。

〈時期〉　円筒上層ａ式土器である。

第８号埋設土器（図６、10－３、PL5－８）

〈位置と確認〉　Ｌ－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。

〈堀り方〉口径35×34㎝、底径９×９㎝、深さ22．2㎝の円形を呈する。

〈覆土〉掘り方１層、土器内１層に区分した。共に暗褐色土である。

〈時期〉　円筒上層ａ式土器である。

第９号埋設土器（図－７、PL5－９）

〈位置と確認〉Ｎ・０－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。第１・６号埋設土器同様堀り方は確認できなかった。

〈覆土〉　土器内１層暗褐色土である。

〈時期〉　円筒下層ｄ2式土器である。

第10号埋設土器（図７、11－１～３、PL6－１、21－１～４）

〈位置と確認〉　０－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。

〈堀り方〉　口径34×26㎝、底径15×10㎝、深さ13㎝の楕円形を呈する。

〈覆土〉埋り方１層、土器内２層に区分した。共に黒褐色土である。また、土器内には有柄石鏃３点、抉入磨製石器１点、石錘１点、凹石１点、有孔石製品１点が混入していた。

〈時期〉　円筒上層ｂ式土器である。

第11号埋設土器遺構（図８、10－４、PL6－２）

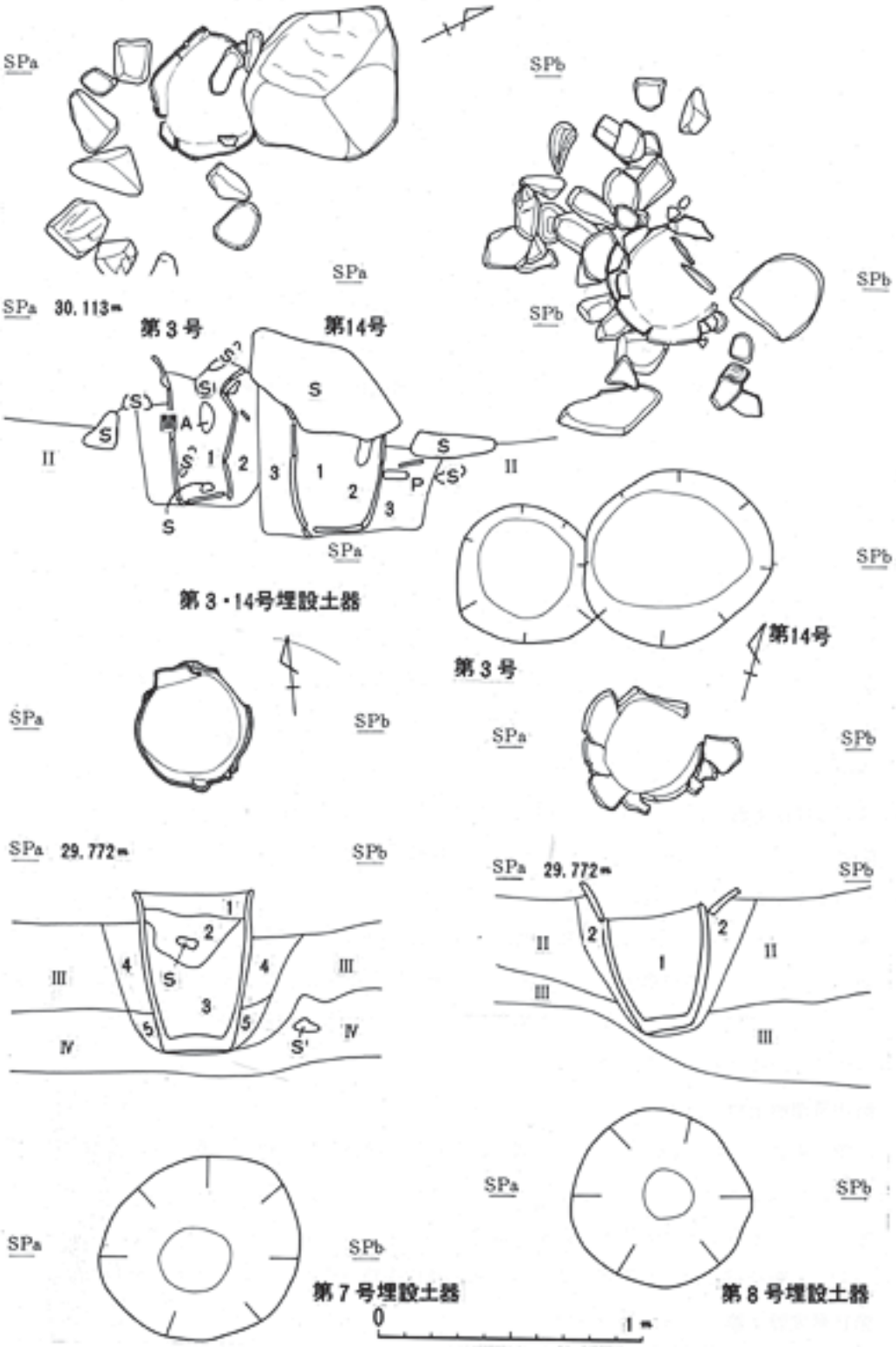


図 6 第3・7・8・14号埋設土器

〈位置と確認〉 K・L一10グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。
〈掘り方〉 口径34×34cm、底径20×20cm、深さ19cmの円形を呈する。
〈覆土〉 掘り方1層、土器内1層に区分した。共に暗褐色土である。また、土器内には15cm大の自然礫が混入していた。
（時期） 円筒上層a式土器である。

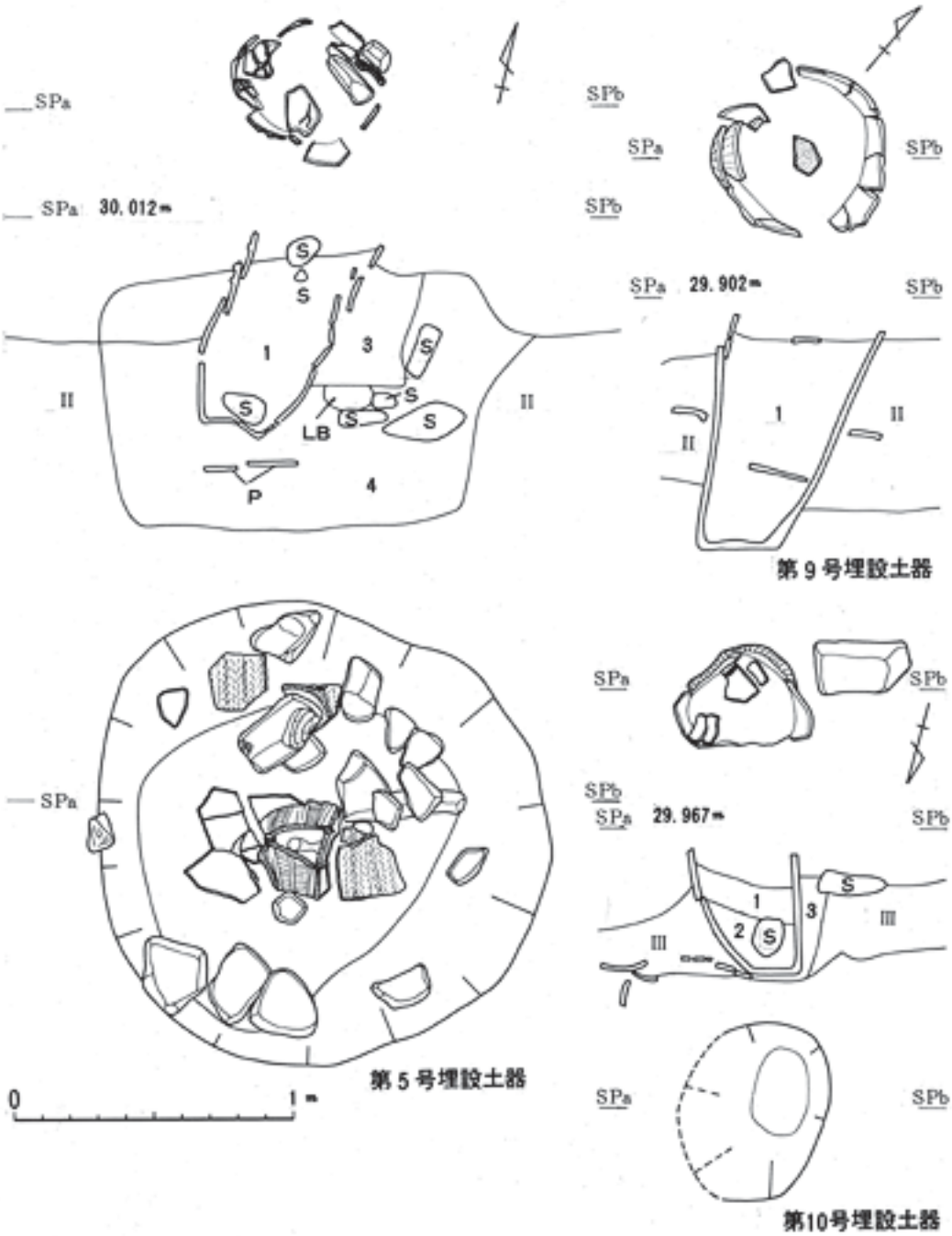
第12号埋設土器（図8、PL6－3）
〈位置と確認〉 J－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。
〈堀り方〉 口径39×37cm 、底径19×16cm、深さ42．6cmの円形を呈する。
〈覆土〉 掘り方1層暗褐色土、土器内3層、第1層褐色土、第2層暗褐色土、第3層褐色土に区分した。また土器内に10cm大の自然礫が混入していた。
〈時期〉 円筒上層a式土器である。

第13号埋設土器（図8、10－5、PL6－4）
〈位置と確認〉 L－10グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。
〈堀り方〉 口径36×35cm、底径16×15cm、深さ25cmの円形を呈する。
〈覆土） 掘り方1層、土器内1層に区分した。共に黒褐色土である。また、土器上面に20cm大の自然礫、掘り方底面に15cm大の自然礫がみられ、掘り方底面の自然礫に土器が乗っかっている状態である。
〈時期〉 円筒上層a式土器である。

第14号埋設土器（図6、10－6、PL6－5）
〈位置と確認〉I－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。本遺構は第3号埋設土器と切り合い関係にあり、本遺構の方が新しい。
〈堀り方〉 口径36×32cm、底径30×22cm、深さ17．2cmの楕円形を呈する。
〈覆土〉 掘り方1層暗褐色土、土器内2層、第1層暗褐色土、第2層黒褐色土に区分した。
また、本遺構は35cm大の自然礫下から検出し、土器内底面近くから少量の骨粉を検出した。
〈時期〉 円筒上層a式土器である。

第15号埋毀土器（図9）
〈位置と確認〉 0－10グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。第1・6・9号埋設土器同様堀り方は検出できなかった。
〈覆土〉 土器内1層黒褐色土である。
〈時期〉 胴部破片のため不明であるが、縄文時代中期（円筒上層式）土器と思われる。

第16号埋設土器（図9、PL6－6）
〈位置と確認〉 M－10グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。北側半分がくずれ落ちた様相



第3号埋設土器
第1層 褐 色 (10YR4/4) 炭化物混入。底部はくしまり弱し。
第2層 暗褐色 (10YR3/4) 炭化物混入。
第3層 暗褐色 (10YR3/4) 炭化物混入。

第7号埋設土器
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物混入。
第2層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物、焼土粒若干混入。
第3層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒、炭化物混入。
第4層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒、炭化物若干混入。
第5層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒、炭化物混入。

第8号埋設土器
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物若干混入。
第2層 暗褐色土 (10YR3/4) 第1層より炭化物混入少し。

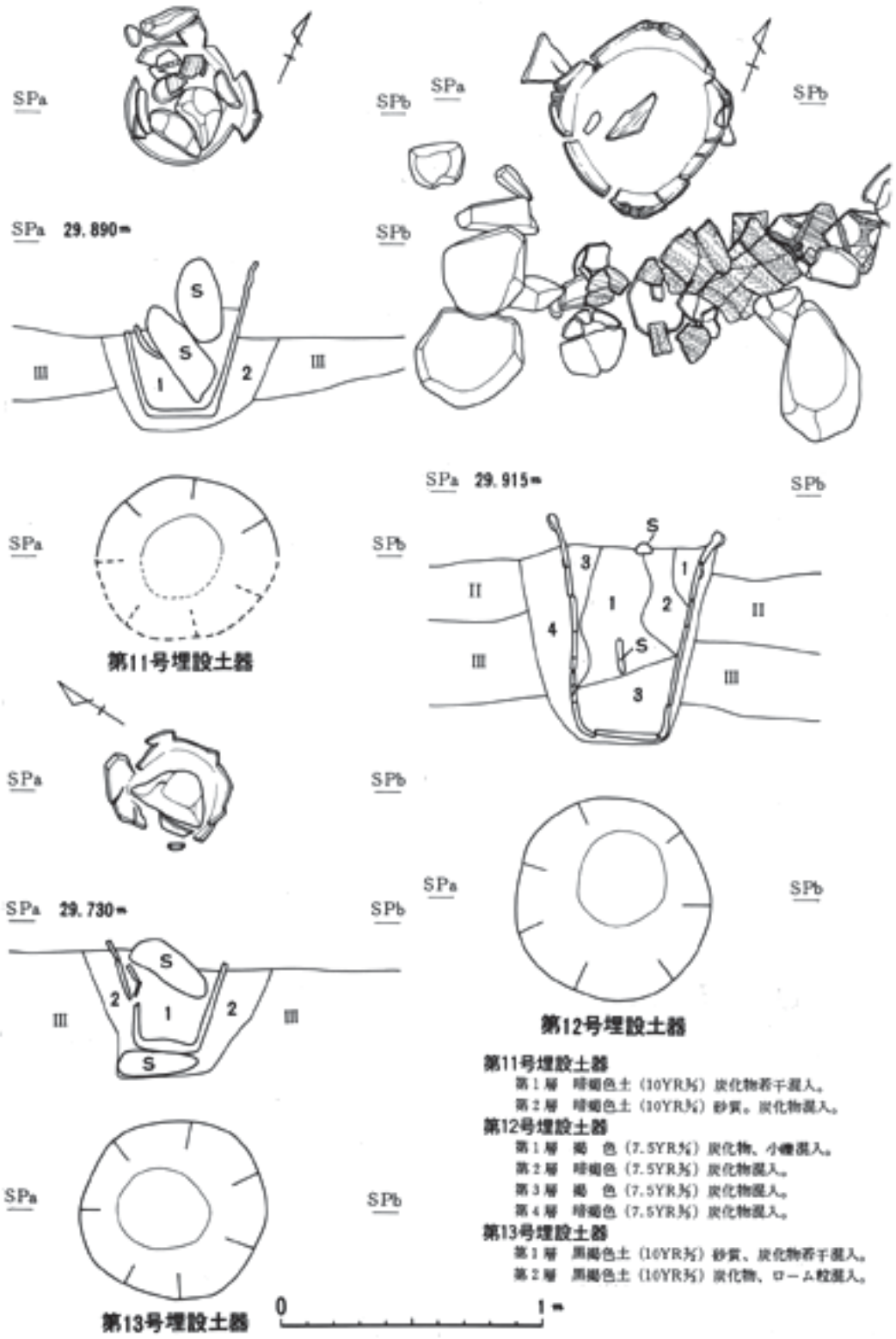
第14号埋設土器
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物・小礫、骨粉若干混入。
第2層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物混入。
第3層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物、ローム粒混入。

第5号埋設土器
第1層 褐 色 土 (7.5YR4/6) 炭化物・骨粉混入。
第2層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 炭化物混入。
第3層 褐 色 土 (7.5YR4/6) 炭化物混入。
第4層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 炭化物混入。

第9号埋設土器
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物多量混入。底部砂質ロームブロック。

第10号埋設土器
第1層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物若干混入。
第2層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物・骨粉混入。
第3層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物混入。

図 7 第5・9・10号埋設土器



第11号埋設土器
第1層　暗褐色土（10YR3/3）炭化物若干混入。
第2層　暗褐色土（10YR3/3）砂質。炭化物混入。
第12号埋設土器
第1層　褐　色（7.5YR4/4）炭化物、小礫混入。
第2層　暗褐色（7.5YR3/3）炭化物混入。
第3層　褐　色（7.5YR4/4）炭化物混入。
第4層　暗褐色（7.5YR3/3）炭化物混入。
第13号埋設土器
第1層　黒褐色土（10YR3/2）砂質、炭化物若干混入。
第2層　黒褐色土（10YR3/2）炭化物、ローム粒混入。

図　8　第11～13号埋設土器

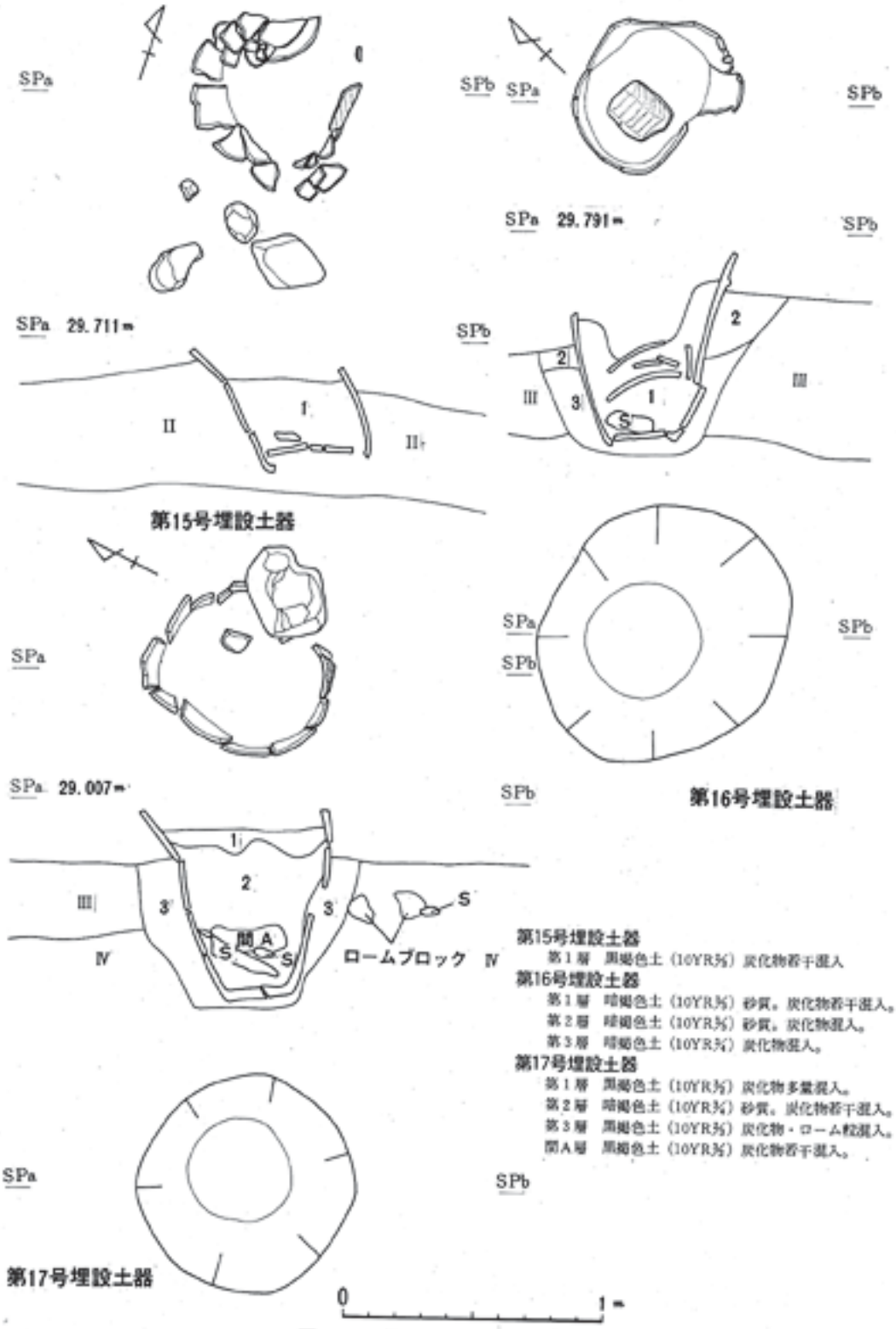


図　9　第15～17号埋設土器

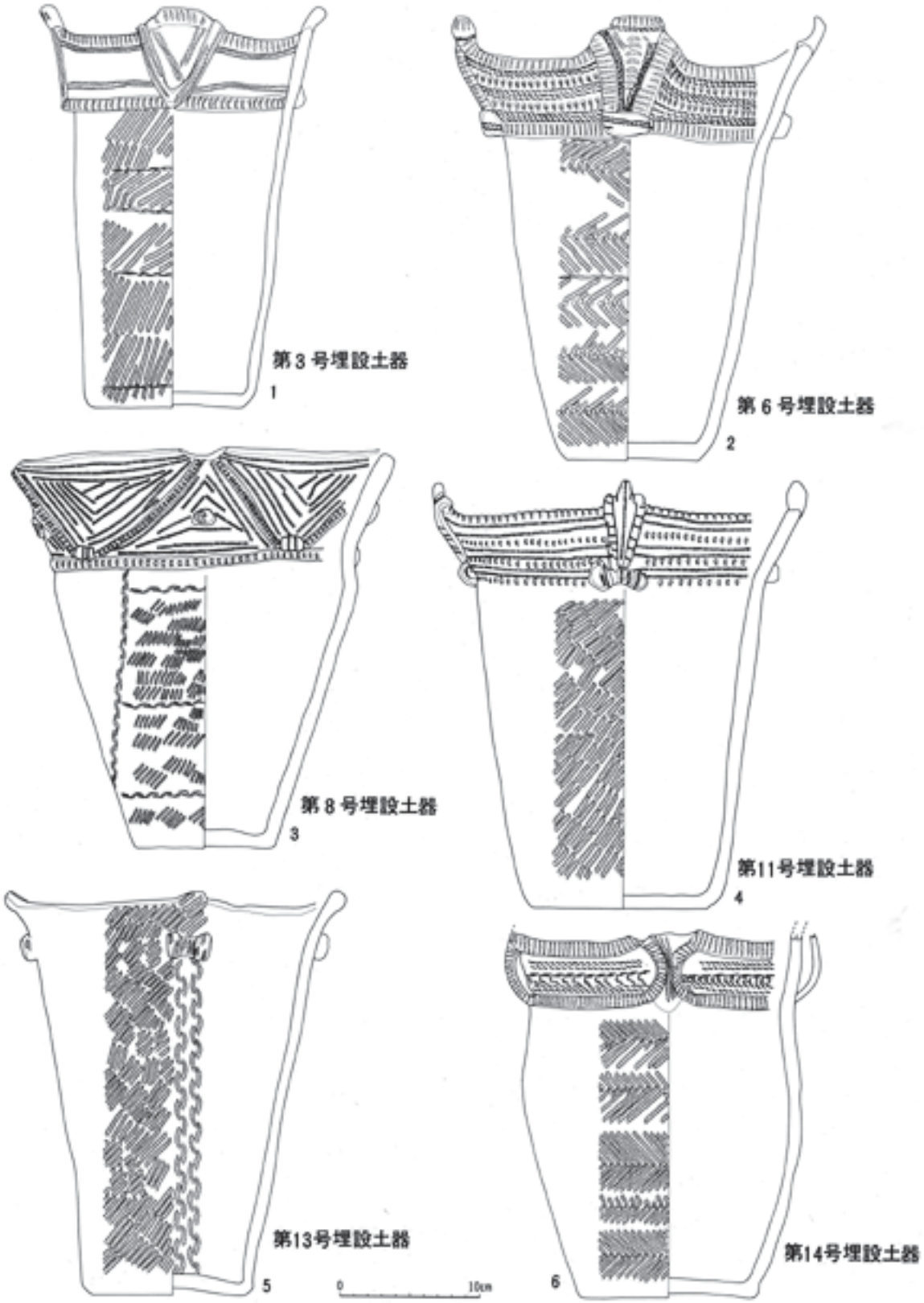


図　10　第３・６・８・11・13・14号埋設土器実測図

を呈する。
〈掘り方〉　口径54×45cm、底径29×20cm、深さ30．7cmの円形を呈する。
〈覆土〉　掘り方2層、土器内1層に区分した。共に暗褐色土である。
〈時期〉　円筒上層a式土器である。

第17号埋設土器（図9、PL6－7）
〈位置と確認〉　N－10グリッドに位置し、新Ⅲ層で確認した。
〈掘り方〉　口径42×41cm、底径20×20cm、深さ27．9cmの円形を呈する。
〈覆土〉　掘り方1層黒褐色土、土器内3層、第1層黒褐色土、第2層暗褐色土、間A層黒褐色土である。また、土器内に10cm大の自然礫が混入していた。
〈時期〉　胴部破片のため不明であるが、縄文時代中期（円筒上層式）土器と思われる。

（小笠原幸範）

2　遺物

土器

本遺跡において出土した遺物は縄文時代前期～後期のもので、A・Bグリッドでは後期、他のグリッドでは中期の遺物が主体をしめる。出土量はダンボール製リンゴ箱で約80箱である。

本項では縄文時代前期のものを第Ⅰ群、中期を第Ⅱ群、後期を第Ⅲ群とした。

第Ⅰ群土器（縄文時代前期、PL6－8・9、7－1～7）

本群土器は円筒下層d1、d2式土器である。口縁は平口経と波状を呈するものがある。

口縁部文様は、R、L、RL、LR、単軸絡条体の圧痕による菱形文、山形文や、口縁に平行なものがみられる。またこれらの文様に竹管刺突文を加えたものや、垂下する押圧文がみられるものもある。これらの押圧文の原体はR、LRが多用されている。また口縁部及び口頸部にいわゆる段を持つもの（PL7－5）もある。

口唇部には単節の横位回転や、竹管刺突文がみられるものもある。

胴部文様は多軸が多く用いられ、木目状、結束第1種、単節、単軸絡条体回転文は少ない。撚り戻し縄文もみられる。

口縁部文様帯と胴部文様帯との区画は、無節か単節の圧痕により区画するものが多く、微隆帯による区画は少ない。

第Ⅱ群土器（縄文時代中期）

本群土器を次のように細分した。第1類土器一円筒上層a式土器、第2類土器一円筒上層b式土器、第3類一円筒上層c式土器、第4類一円筒上層d式土器、第5類一円筒上層e式土器、第6類一榎林、最花（中の平Ⅲ式）式土器である。

第Ⅱ－1類土器（PL7－8～21、PL8～14）

図　11　遺物出土状態、第10号埋設土器出土石器

本遺跡において主体をしめるのが本群土器である。ここでは、口縁部文様、隆帯、口縁部文様帯と胴部文様帯との隆帯による区画の有無等から、さらに細分した。

第Ⅱ－1－a類土器（PL7－8～14）

本類は、口縁部文様帯が押圧縄文による平行、波状文のものである。

口縁は平口縁と波状口縁があり、平口縁が多い。口縁部は直立ぎみのものが多く、外反するものは少ない。波状口縁では垂下する押圧縄文もみられる。

口縁部押圧縄文には、1段、2段が多く、単軸絡条体のものも見られる。また、胴部文様はLRの横位回転が多く、その他に結束第1種がみられる。結節部を横位回転し、施文しているものもある。

口唇部には押圧縄文、回転文がみられ、LRが多用されている。

第Ⅱ－1－b類土器（PL7－15～21、8・9－1～8）

本類は、口縁部文様が垂下する隆帯、ボタン状貼付けと、押圧縄文による平行、波状、山形文を施文するものである。垂下する隆帯は逆「T」字のものが多い。

口縁は、小突起を有するものと、波状口縁が主で、平口縁はほとんどなく、直立ぎみまたは外反するものが多い。

口縁部の押圧縄文は、第Ⅱ－1－a類とほぼ同様の原体を使用している。また、胴部文様はRL、LR共に施文され、小突起下の胴部には、縦方向の結節回転や棒状刺突文が施文されているものもある。また、口縁部文様帯と胴部文様帯とを竹管刺突文やLRの先端部圧痕により区画しているものもある。

口唇部は、押圧縄文が多用され、回転文は少なく、原体はLRが多い。また、竹管刺突文を施文しているものもある。

垂下する隆帯、ボタン状貼付けには口縁部文様帯と同様の押圧縄文を施文している。

第Ⅱ－1－c類土器（PL9－9～12）

本類は、口縁部文様が「c」字、逆「c」字隆帯に、押圧縄文と押圧縄文間の縦の圧痕文を施文しているものである。口縁は小突起のあるものと波状口縁があり、直立ぎみのものは少なく、外反するものが多い。

口縁部の押圧縄文はR、LRが多用され、また、単軸絡条体のものもある。平行押圧縄文間には板状工具による刺突がみられるものもある。また、口縁部文様帯と胴部文様帯とを板状工具による刺突文により区画しているものもある。

口縁郡は大きくなり、小突起および波状部では器内面の粘土をつまみ上げたものもみられる。

胴部文様は、LR、結束第1種の横位回転によるものが多く、口唇部は押圧縄文によるものがほとんどで、回転文によるものはみられない。

「c」字、逆「c」字隆帯には口縁部文様帯と同様の押圧縄文がみられる。

第Ⅱ－1－d類土器（PL9－13～15、10－1～11）

本類は、口縁部文様帯と胴部文様帯とを隆帯により区画し、垂下する隆帯、「c」字、逆「c」字隆帯と押圧縄文と押圧縄文間の縦の圧痕文とを組み合せたものである。口縁は小突起を有するもの、波状口縁があり、外反するものが多い。

口縁部の押圧縄文は、単軸絡条体のものが多く、他に1段、2段のものがある。また、平行押圧縄文間には竹管刺突文が施文されているもの、波状口縁が肥大し、器内面の粘土をつまみ上げたものもみられる。

胴部文様は、単節、結束第1種、結束第2種が多用される。また結節部を横位施文したものもある。胴部上半にLRの横位回転、下半に多軸を施文したものもある。

口唇部には、単軸絡条体圧痕文、竹管刺突文が多くみられ、まれに単節の回転文がみられる。

口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画する隆帯上には、押圧縄文、単軸絡条体圧痕文、竹管・棒状工具による刺突文がみられる。

第Ⅱ－1－e類土器（PL10－12～16）

本類は、口縁部文様が「八」字貼付けと平行押圧縄文、押圧縄文間の縦の圧痕文とを組み合せたもので、口縁は小突起、波状口縁で、外反するものが多い。また、「八」字貼付け下にボタン状貼付けをしたものもある。

口縁部文様の縦の押圧縄文には竹管刺突文を施文したものもある。

胴部文様は単節、結束第1種の横位回転がみられ、また口縁部文様帯との区画を結節部の横位回転により区画しているものもある。

口唇部では押圧縄文がみられる。口唇部が肥大し、波状口縁部では器内面の粘土をつまみ上げたものもある

第Ⅱ－1－f類土器（PL11－1～10）

本類は、口縁部文様帯と胴部文様帯を隆帯で区画し、口縁部文様が「八」字貼付けと、押圧縄文による平行、波状、平行押圧縄文間の縦の圧痕文を組み合せたものである。口縁は小突起のものが多く、波状口縁は少ない。また、外反するものが多い。

口縁部文様は単節、単軸格条体の押圧が多く、棒状工具による刺突がみられるものもある。

胴部文様はLR、結束第1種の横位回転のものが多く、口唇部には押圧縄文がみられる。

口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画する隆帯及び、「八」字隆帯上には、押圧縄文、単軸絡条体圧痕文、竹管刺突文がみられる。また、「八」字隆帯が連続し、山形文的になっているものには、この接点に小筒状の貼付けをしたものもある。

第Ⅱ－1－g類土器（PL11－11／、13）

本類は、口縁部文様が「v」字状貼付けと、平行押圧縄文と押圧縄文間の縦の圧痕文を組み合せたものである。口縁は波状口縁で、外反するものが多い。また、「v」字状貼付け下には小筒、円形状の貼付けがみられる。

口縁部文様の縦の圧痕文には、原体をまるくし、曲面を圧痕したものもある。

胴部文様は単節、結束第１種が多用され、口唇部には押圧縄文がみられる。また、「v」字状貼付け、小筒・円形の貼付けには押圧縄文を施文している。

第Ⅱ－１－ｈ類土器（PL12－１～4）

本類は、口縁部文様帯と胴部文様帯とを隆帯により区画し、波状口縁及び突起部から垂下する鋸歯状の貼付けがみられ、この隆帯間に押圧縄文による平行、鋸歯状、平行押圧縄文間の縦の圧痕文、うず巻き文等を組み合せたもめで、波状及び突起間には「c」字状、垂下する貼付けが施文されたものもある。口縁は強く外反するものが多く、波状口縁部が肥厚する。

口縁部文様は単節圧痕が多用され、平行押圧縄文間には板状工具による刺突がみられるものもある。また、波状間には円形の貼付けが多く、垂下する隆帯の変わりに鋸歯状の押圧縄文を施文しているものもある。

胴部文様はLR、結束第１種が多用され、結節部を縦方向や横方向に施文しているものもある。

口唇部及び隆帯上には口縁部文様と同じ原体が押圧されている。

第Ⅱ－１－ｉ類土器（PL12－５～9、13－１～8）

本類は、口縁部文様帯と胴部文様帯を隆帯により区画し、波状口縁部には「v」字状隆帯がみられるものである。波状口縁を呈するものが多く、口縁部に大きくなり、弁状突起、王冠状突起が多くみられ、外反するものが多い。

波状口縁部には押圧縄文による平行文、平行押圧文間の縦の圧痕文、山形文、鋸歯文、いなずま形、「x」字等の文様が施文されている。また、弁状突起部に孔を持つもの、橋状杷手を持つものもある。

胴部文様は単節、結束第１種の横位回転が多用され、結節郡を横位回転するものもある。

口唇部、隆帯上には、口縁部文様帯と同様の押圧縄文を施文している。

第Ⅱ－１－ｊ類土器（PL13－９～11、14－１～6）

本類は、口縁部文様と胴部文様を隆帯により区画し、口縁部文様が隆帯による貼付け文と、これに沿って押圧縄文を施文したものである。口縁は強く外反するものが多く、弁状突起、王冠状突起が多くみられる。また橋状把手もある。

胴部文様は単節、結束第１種の横位回転が多用される。

口唇部及び隆帯には、口縁部文様と同様の押圧縄文が施文されている。

第Ⅱ－１－ｋ類土器（PL14－７－18）

本類は、メルクマール文様が明確ではないが、円筒上層ａ式に含まれるものである。地文縄文だけのもの、垂下する隆帯及び、小筒状の隆帯を貼付け、縄文を施文したもの、口縁部文様帯と胴部文様帯とを隆帯により区画し、垂下する隆帯と組み合せ縄文を施文したものがある。

口縁は平口縁、小突起を有するもの、波状口縁があり、また、直立ぎみのもの、外反するもの、ラッパ状に開くものがある。

縄文原体はLRの横位回転が多く、他にL、結束第１種がある。

口唇部には押圧縄文、回転文がみられる。

第Ⅱ－２類土器（PL15－１～13）

本類は円筒上層ｂ式土器である。隆帯及び、爪形の押圧縄文をメルクマールとしているものである。

４波状口縁を呈するものが多く、胴郡文様は結束第１種、結束第２種が多用され、単節が多く用いられるが、無節のものもある。

弁状突起・王冠状突起が多く、突起部に孔を持つもの、裏面に太い沈線を持つものなどがある。また、爪形の押圧縄文には爪形というよりは直線に近いものもある。

第Ⅱ－３類土器（PL15－14～21）

本類は円筒上層ｃ式土器である。隆帯と爪形の竹管刺突文及び棒状工具による刺突文をメルクマールとするものである。

口縁部は波状を呈し、弁状突起・王冠状突起が多く、強く外反するものが多い。

胴部文様は結束第１種を多用している。

第Ⅱ－４類土器（PL15－22～26）

本類は円筒上層ｄ式土器である。地文縄文に隆帯を貼付け文様帯を構成し、文様帯が胴部中ばあたりまで下るのをメルクマールとするものである。

本類は出土量が少なく、第１・２号住居跡出土以外のものはほとんど出土していない。

PL15－22は波状口縁を呈し、波状口縁部直下にはボタン状貼付けがみられ、三角形を基盤とした貼付け文がみられる。隆帯には押圧縄文がみられ、地文縄文は結束第１種である。

また、器内面に円形の凹がみられるものもある。

第Ⅱ－５類土器（PL15－27）

本類は円筒上層ｅ式土器である。出土量が少なく、PL15－27は口縁突起部で地文はRLである。

第Ⅱ－６類土器（PL15－28～30）

本類は榎林及び、最花（中の平Ⅲ式）式土器である。出土量は少なく数点にしかすぎない。前者がPL15－28で、後者がPL15－29・30である。　（小笠原幸範）

参考文献

江坂輝弥編　1970「石神遺跡」　森田村教育委員会

鈴木克彦　　1975「中の平遺跡調査報告書」　青森県教育委員会　第25集

長谷部言人　1927「円筒土器文化」人類学雑誌42-1

三宅徹也　　1971「野木和遺跡調査報告書」　青森市の埋蔵文化財　5

　　1977「円筒土器の概念とその崩壊」　青森県立郷土館調査研究年報　第3号

村越　潔　　1974「円筒土器文化」　雄山閣

山内清男　　1929「関東北に於ける繊維土器」　史前学雑誌1－2

　　1930「斜行縄文に関する二・三の観察」　史前学雑誌　2－3

第Ⅲ群土器

本遺跡における縄文時代後期土器の出土はすべて、グリッドA－10区とB－10区にかけての出土である。器形は深鉢、浅鉢、鉢形、台付鉢形、壷形、ミニチュア土器等である。出土層位は第ⅩⅤ層より、第ⅩⅩⅢ層間に集中している。層位的把握は各層位が非常に薄いためと、数回にわたる河川の氾濫のため不可能であった。従って文様分類にとどめておきたい。

第1類（図12－1、PL16－1）

斜行縄文を地文とし、頸部、胴部上半、胴部中央に2条の沈線を横位方向に施文し、文様区画帯を構成している。上段区画帯には太い沈線による三角形を構成しており、上位沈線は入組風波形文を交互に施文。下段区画帯には入組風波形文を連続させているものである。縄文原体はLRを横位方向に回転させており、口縁部にも若干の縄文がみられる。

第2類（図12－2、PL16－2～4、PL18－1～4）

地文が無文で、口縁部が折り返し状となっているものである。図12－2、PL16－2は台付鉢である。台部は3個に分割されている。焼成、胎土は良好で、砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。PL18－2は鉢形である。底部はひじょうに薄く作られており、口縁部は若干外反する。胴部上半に輪積み法によると思われる粘土紐の接合部がみられる。PL16－3は4個の波状口縁をもつものである。焼成、胎土とも不良で非常にもろい。底部は若干上げ底風になっている。PL18－3はミニチュアの台付である。口縁部は折り返しというよりも、粘土紐の貼り付けによる成形と思われる。

第3類（図12－3・4、PL16－5、PL18－5～7・9）

地文は無文で、口頸部に数条の沈線のみを施文するものである。図12－3、PL16－5は焼成、胎土とも不良で暗褐色を呈する。上下二段の沈線内には長楕円形の文様を有する。図12－4、PL18－5はミニチュアの台付で、横位沈線を「S」字状沈線で区画している。

第4類（図12－7・8、PL16－6～10・13、PL18－8、PL19－1～5）

胴部中央に入組風渦巻文を横位方向に施文したものである。図12－7、PL16－6は探鉢形土器である。口頸部には円形及び長楕円形の沈線文。胴部下には3条の横位沈線を（）状沈線で区切り施文している。胴部には入組風渦巻文が上下交互に施文されている。焼成は良好。胎土に小石を含む。図12－8、PL16－7は口頸部に4条の沈線を施文。その沈線を「弓」字状の沈線で区分している。胴部中央には入組風渦巻文が4個連続したものである。台付鉢で口縁は平口縁。PL16－13は鉢形土器で、口頸部は2条の沈線と長楕円形沈線文による構成。胴部下に2条の平行沈線をめぐらし、胴部中央に入組風渦巻文を5個配置したものである。PL16－8は台付鉢である。

第5類（図12－9・10、PL16－11・12、PL17－1～3、PL19－6～19）

斜行沈線による文様構成である。図12－9、PL16－11・2、PL17－2、PL19－6～10は口頸部から底部付近にかけて格子目状を呈する。図12－10、PL17－1は各沈線に交わりがなく、左傾、右傾を交互に施文しているのである。口縁部は平縁と小波状を呈するものがあるが、小波状を呈するものは口頸部に1～2条の沈線を施文し、平口縁のものは円形及び長楕円形沈線の組み合せが多い。しかし両者混合したものもみられる。PL17－3は3条一組による右下りの斜行沈線を施文したものである。

第6類（PL17－4・5）

頸部に沈線、胴部に縄文を施文するものである。口縁部は4個の波状口縁で、口頸部に4～6条の横位沈線をもつ。PL17－4は2条の沈線区画帯内に円形及び、長楕円形沈線文で頸部文様を構成している。胴部には1段の網目状縄文を底部付近まで施文しており、器面全体に唐きをかけている。PL17－5は胴部下半にも沈線を施文しており、2条の平行沈線内に円形及び、長楕円形沈線の組み合せによる文様を構成している。胴部にはLRの回転による縄文を施文した後、磨きをかけている。

第7類（図12－11、PL17－6～8、PL19－11～21）

数条の沈線を一単位とし、蛇行文を主体としたものである。図12－11、PL17－6・7は壷形土器である。文様構成は横方向への展開で、2条の太い沈線を施文後、中に数条の沈線を施文するものである。PL17－8は深鉢形土器で、文様構成は縦方向を基調とするものである。文様施文方法は前者と同様である。いずれも胴部下半は無文である。

第8類（PL19－22～23）

胴部中央に渦巻風入組文を縦方向に施文したものである。口縁部は4個の波状口縁をもつものと思われ、波状の頂点下に円形文をもち、その下に渦巻風入組文を連ねたものである。鉢形土器で、焼成は良好。胎土に小石を含む。

第 9 類（図 12 － 12、PL17 － 9・10、PL20 － 1）

円形及び長楕円形沈線文を縦方向に施文し、文様区画帯を構成するものである。図 12 － 12、PL17 － 9 は 6 個の波状口縁をもち、波状部に刻みを入れたものである。波状頸部には貼り付けによる隆帯をもち、文様区画帯には長楕円形沈線文による文様を構成している。PL17 － 10 は頸部に橋状把手を持つもので、胴部文様区画帯内に渦巻風入組文を施文するものである。

第 10 類（PL17 － 11 ～ 12、PL20 － 2 ～ 12）

文様区画帯内に刺突文を有するものである。PL17 － 11 は大形の鉢形土器と思われるもので、頸部の長楕円形沈線文内に竹管による刺突を施文、その下の横位展開の渦巻風入組文にそって刺突文を施文しているものである。胴部下半は無文である。PL17 － 12 は地文に LR の縄文を施文。口唇部と内側口唇部下に竹管による刺突がみられる。頸部には円形沈線文を基点に「 」状に太い竹管刺突を施文。胴部にも刺突がみられるが、全体の文様構成は不明である。

以上第 10 類まで分類したが、本群はその文様構成、焼成、胎土からみて十腰内㈱式と認められよう。その中でも第 1 類は、より古手のものと思われる。第 2 類～第 9 類は十腰内㈱式のものとして普扁的なものであろう。第 10 類は渦巻風入組文の施文特徴が第 4 類と近似しているため十腰内Ⅰ式に属するものではなかろうか。（高坂　一夫）

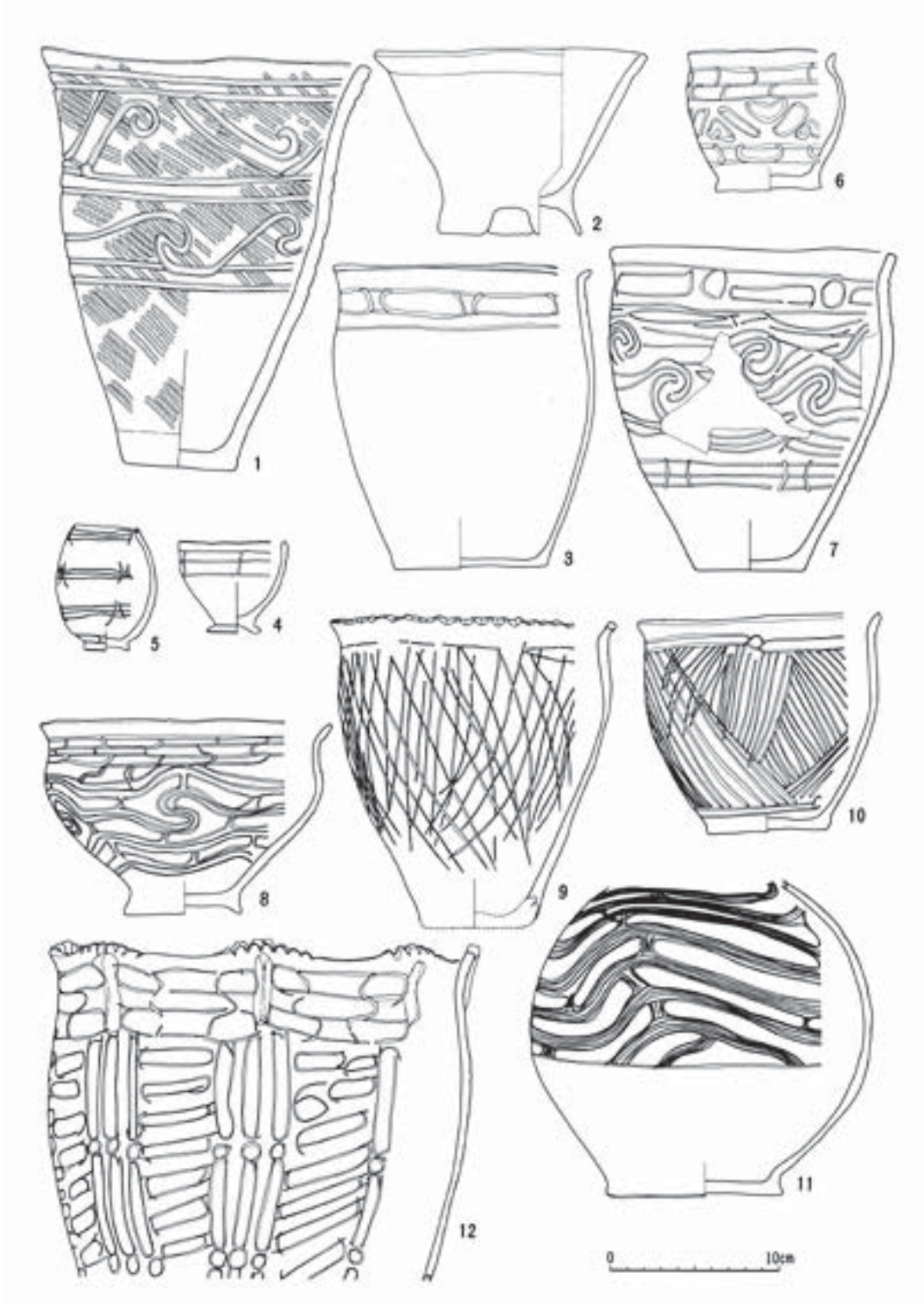


図　12　第Ⅲ群土器実測図

参考文献

葛西　励　1979　「蛍沢遺跡」　青森市蛍沢遺跡発掘調査団
1980　「尾上町李平Ⅱ号遺跡発掘調査報告書」　尾上町教育委員会
鈴木克彦　1975　「中の平遺跡調査報告書」　青森県教育委員会　第25集
新谷　武　1976　「白山堂・妻の神遺跡調査報告書」　青森県教育委員会　第30集
成田滋彦　1975　「近野遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）」　青森県教育委員会　第22集
1981　「鷹架遺跡調査報告書」　青森県教育委貞会　第63集

石器（PL21－4～28）

本遺跡において出土した石器は石鏃30点、石槍6点、石ヒ6点、石ベラ2点、スクレイパー20点、磨製石斧14点、凹石30点、敲石6点、石錘3点、北海道式石冠2点、半円状扁平打製石器1点、抉入磨製石器1点、磨石1点、石皿5点である。

石鏃は全て有柄石鏃で作りが雑なものが多く、石質は珪質頁岩が主体をしめ、玉ずいも若干みられる。石ヒも石鋳同様作りは雑であり、珪質頁岩が主体をしめるが、黒曜石製のものもある。石錘は両端を打ち欠いただけのものであるが、敲打により溝を十文字にめぐらしているものや、製作中と思われるものもある。これは表面を敲打により溝をめぐらしているが、裏面は線条痕のような溝を残している。

本遺跡では磨石が極単に少なく、他の縄文時代前期～後期の遺跡とは様相を異にしている。

（小笠原幸範）

文化遺物

三角形土製品（図13－1～8、PL20－13～20）

8点の出土である。すべてA－10区、B－10区からの出土で、深鉢形土器の胴部破片を利用したものである。ほぼ正三角形を呈しており、各辺は文様面の方へ向って、研磨による加工が施されている。文様構成は図13－7、PL20－19を除いては沈線による格子目状文であり、同一個の破片を利用したものである。

円盤状土製品（図13－9～14、PL20－21～26）

6点の出土。図13－14、PL20－26を除いてはすべてA・B－10区からの出土。周縁を打ち欠き、あるいは研磨によって成形している。探鉢形土器の胴部破片を利用している。文様構成は図13－9、PL20－21は無文。図13－10、PL20－22は1条の沈線を有する。図13－11～12、PL20－23～24は格子状文。図13－13、PL20－25は3条一組による沈線。図13－14、PL20－26はK－10区からの出土で、LRの回転による縄文である。

円盤状有孔土製品（図13－15～19、PL20－27～31）

すべて中期包含層からの出土。文様構成はすべてLRの回転による縄文である。図13－18、

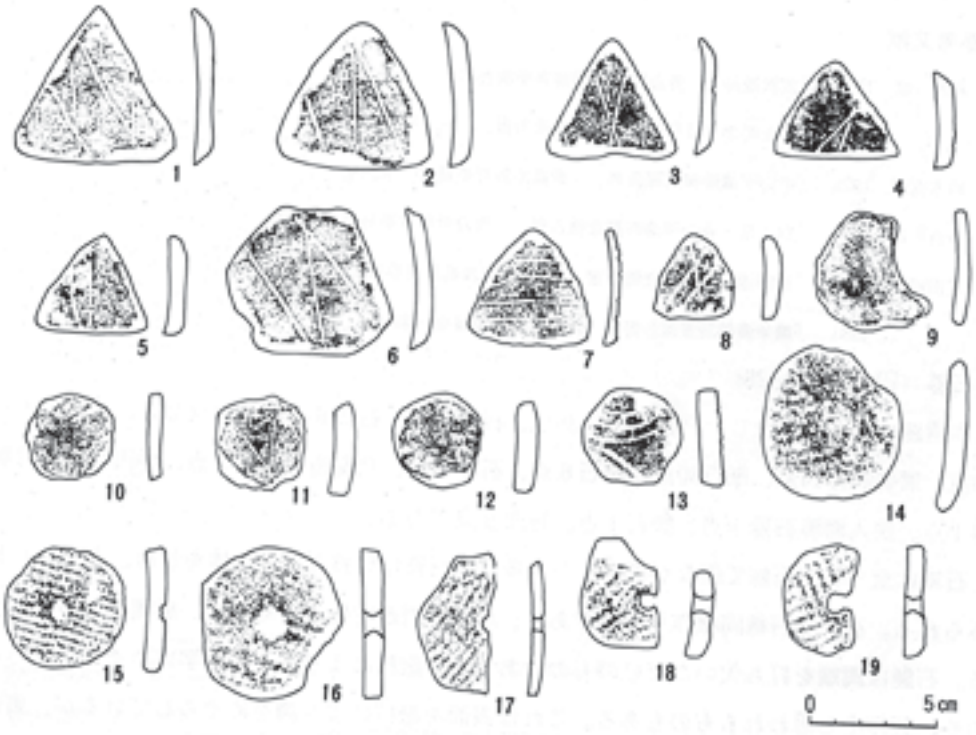


図 13 三角形・円盤状土製品実測図

PL20 － 30 は口縁部破片を利用したものである。孔は両面からの貫通であるが、図 13 － 15、PL20 － 27 は未貫通のものである。

スプーン形土製品（PL20 － 32）

N 一 10 区第 I 層からの出土。焼成は良好で色調は明褐色を呈する。砂粒を多く含んでいるため表面はもろい。無文である。

きのこ形土製品（PL20 － 39）

B － 10 区後期包含層からの出土である。粗雑に粘土をこねたようであり、粘土のかさなり部及び指痕を多量に残している。かさの部分を摘んで外側へ出したようであり、先端部はやや厚くなっている。

動物形土製品（PL20 － 38）

B － 10 区後期包含層からの出土。頭部、尾部は欠損しており、動物の種類は不明。背部は皿状になっており、側面から見た場合脚部のついた石皿状である。無文。焼成は良好であるが、砂粒を多く含む。

土偶（PL20 － 33 ～ 37）

5 点の出土。基本型は三角形を呈しており、PL20 － 33 は首が前に突き出た形態をもつ。耳及

び両肩に貫通孔をもち、目は竹管による刺突で表現している。まゆから鼻にかけて粘土紐による隆帯。胴部文様は両面とも櫛目状の沈線をもって表現している。33を除きすべて欠損品である。（高坂　一夫）

Ⅳ　ま　と　め

本遺跡は、縄文時代前期～後期の遺跡であるが、約200㎡の狭い発掘面積で、リンゴ箱ダンボール約80箱という多量の遺物が出土した。

検出遺構は、住居跡2軒、埋設土器17基である。住居跡はいずれも縄文時代中期（円筒上層e式）のものである。また、埋設土器は、縄文時代前期のもの1基、他は中期のもので、特に円筒上層a式のものは11基を数える。これら埋設土器の中には礫でフタをしたようなもの、副葬品的なものや、骨粉などが混入しており、埋設土器を考える上で貴重な資料となろう。

出土遺物では、A・Bグリッドでは縄文時代後期の遺物が主体をしめている。このA・Bグリッドは旧河川にあであったことが判明した。また、いわゆる粗製土器（地文縄文のもの）が少なく、台付浅鉢、壷形土器の多さが目についた。

A・Bグリッド以外の地区からは、縄文時代前期～中期のものが多く出土し、特に中期の円筒上層a式が主体をしめている。

近年、円筒上層a式の細分化が進んでいるなかで、特に円筒上層a1、a2式土器が主体をしめる本遺跡の資料は、今後の土器編年上の重要な資料となるであろう。（小笠原幸範）

発掘風景

第１号住居跡

第３号埋設土器

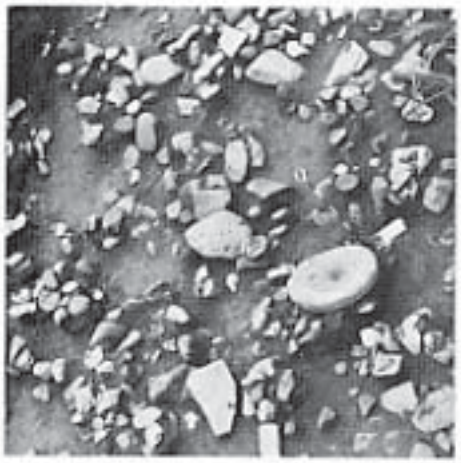
第11号埋設土器

第７号埋設土器

第13号埋設土器

← 第12号埋設土器

PL１　発掘風景、第１号住居跡、第１・３・７・11～13号埋設土器



1

2

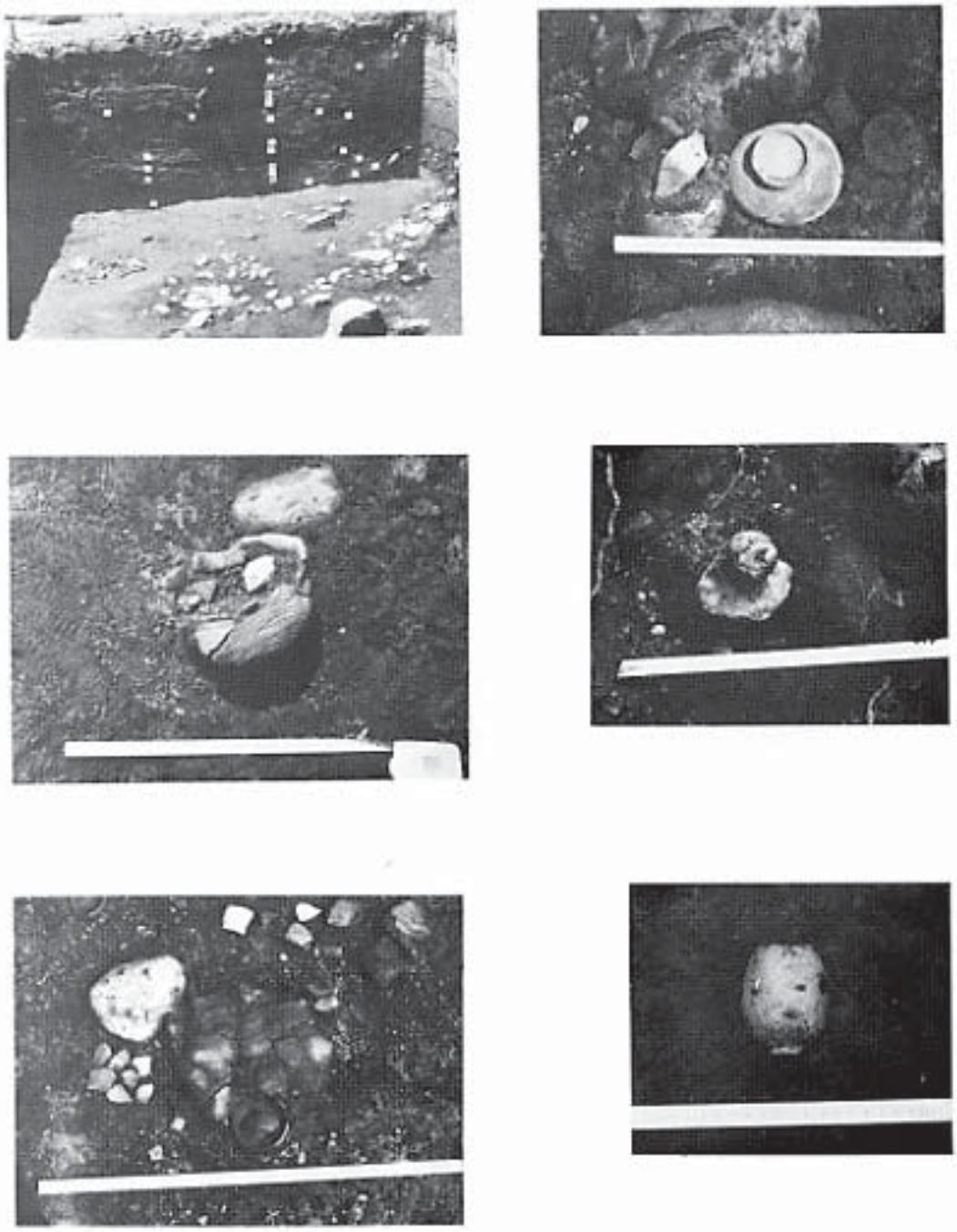
3

4

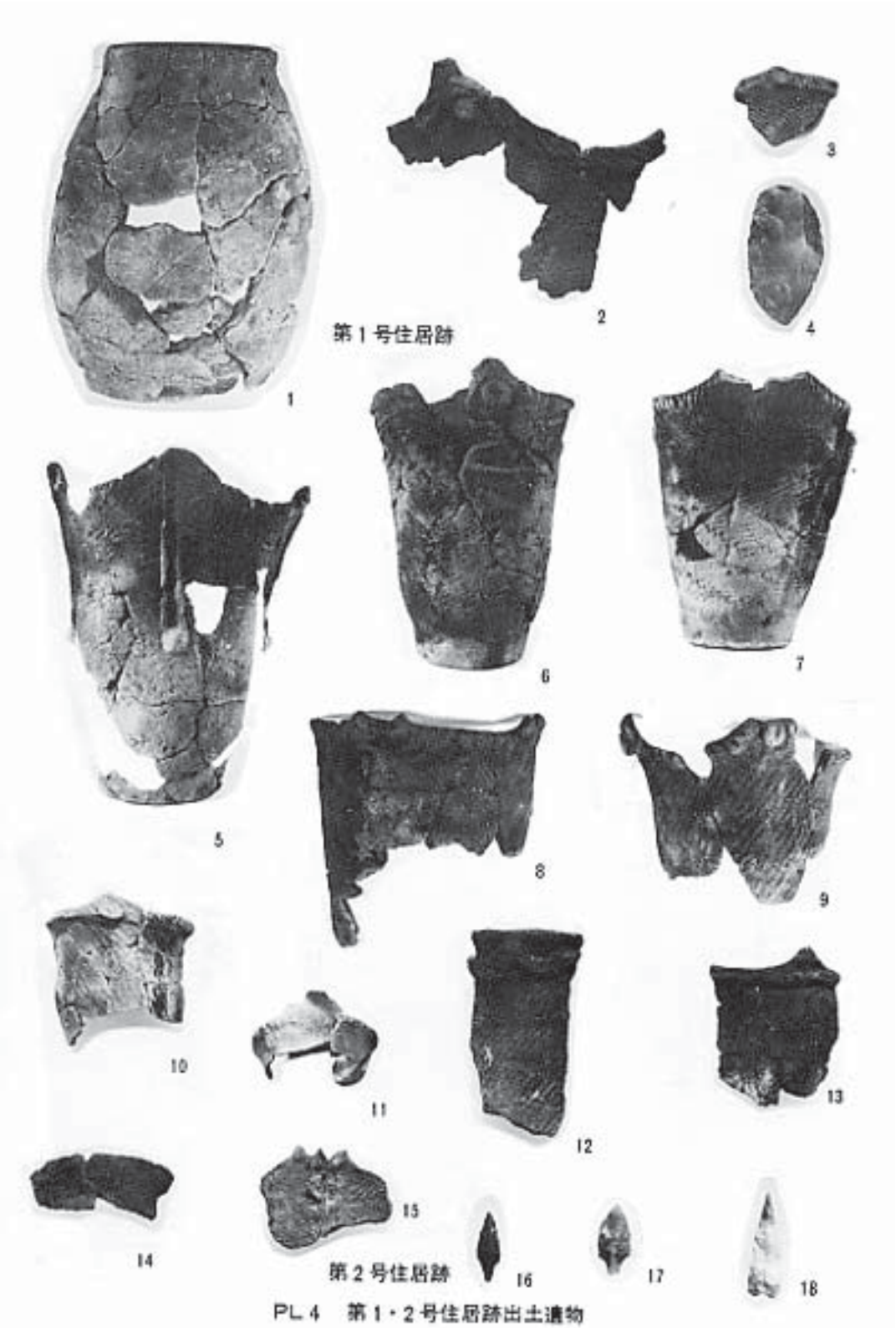
5

6

PL 2　遺物出土状態



PL 3　後期包含層遺物出土状態



PL 4　第1・2号住居跡出土遺物

第１号埋設土器

第２号埋設土器

第３号埋設土器

第４号埋設土器

第５号埋設土器

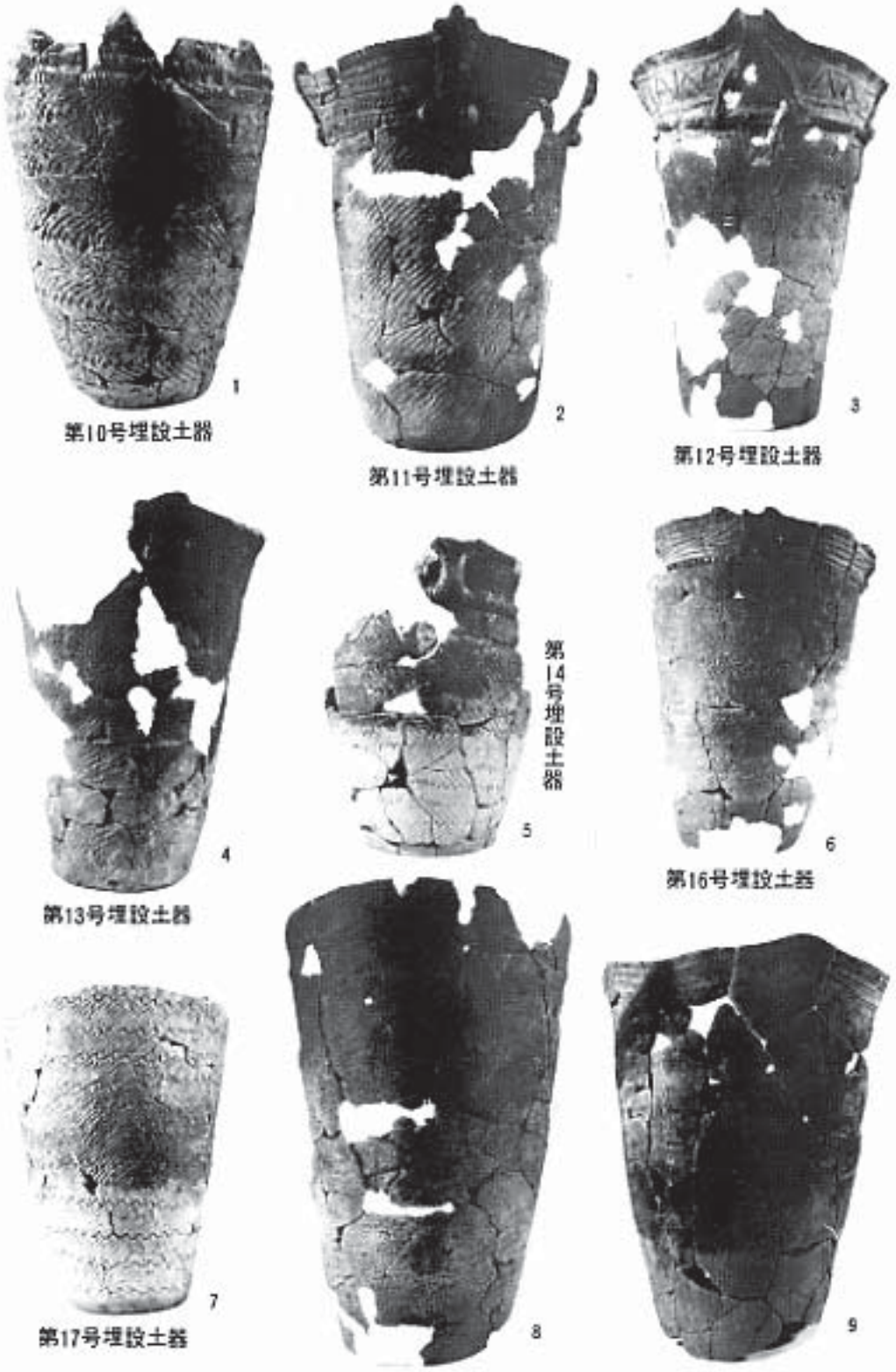
第７号埋設土器→

第９号埋設土器→

第６号埋設土器

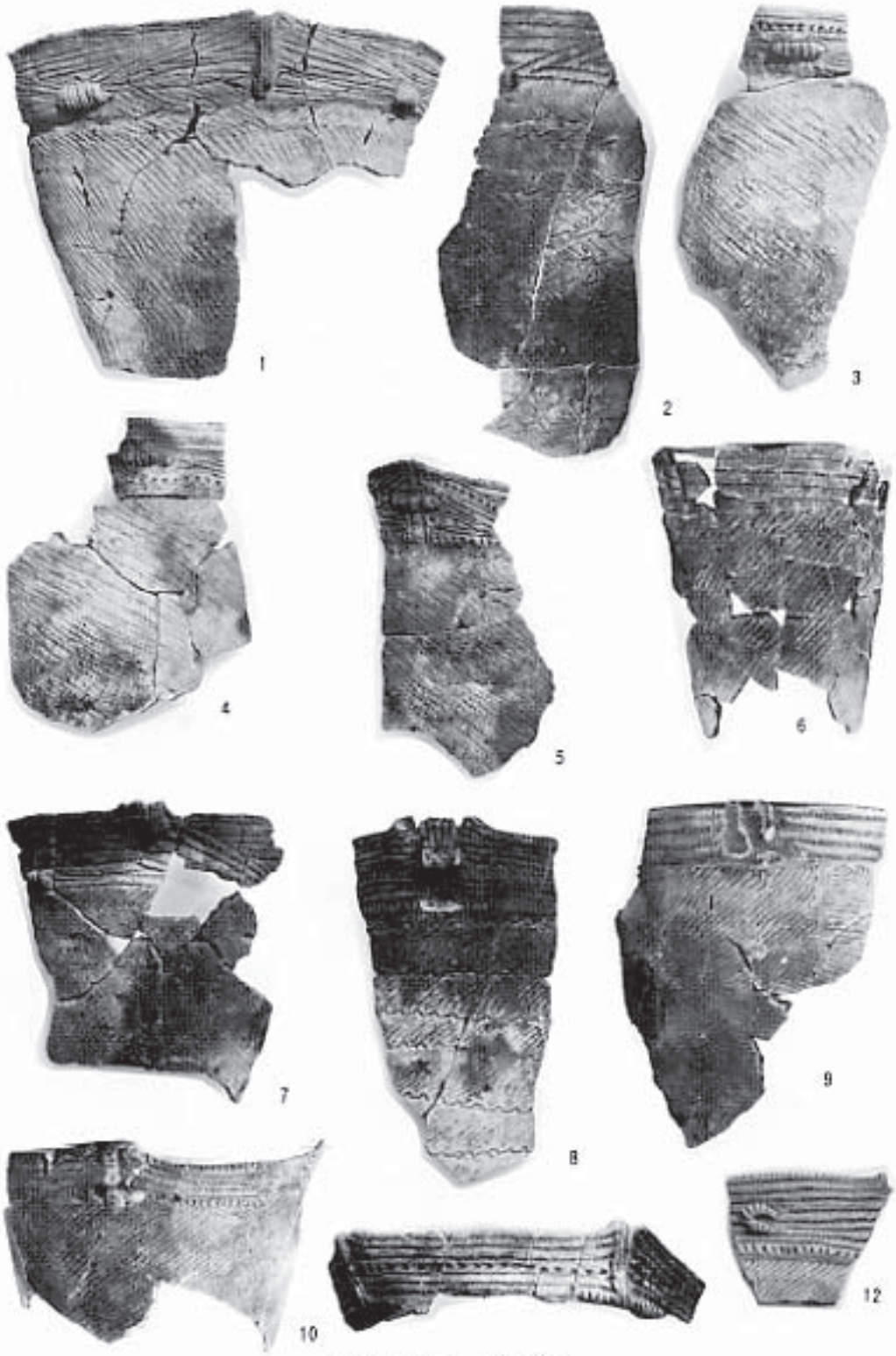
第８号埋設土器→

PL 5　第１～９号埋設土器

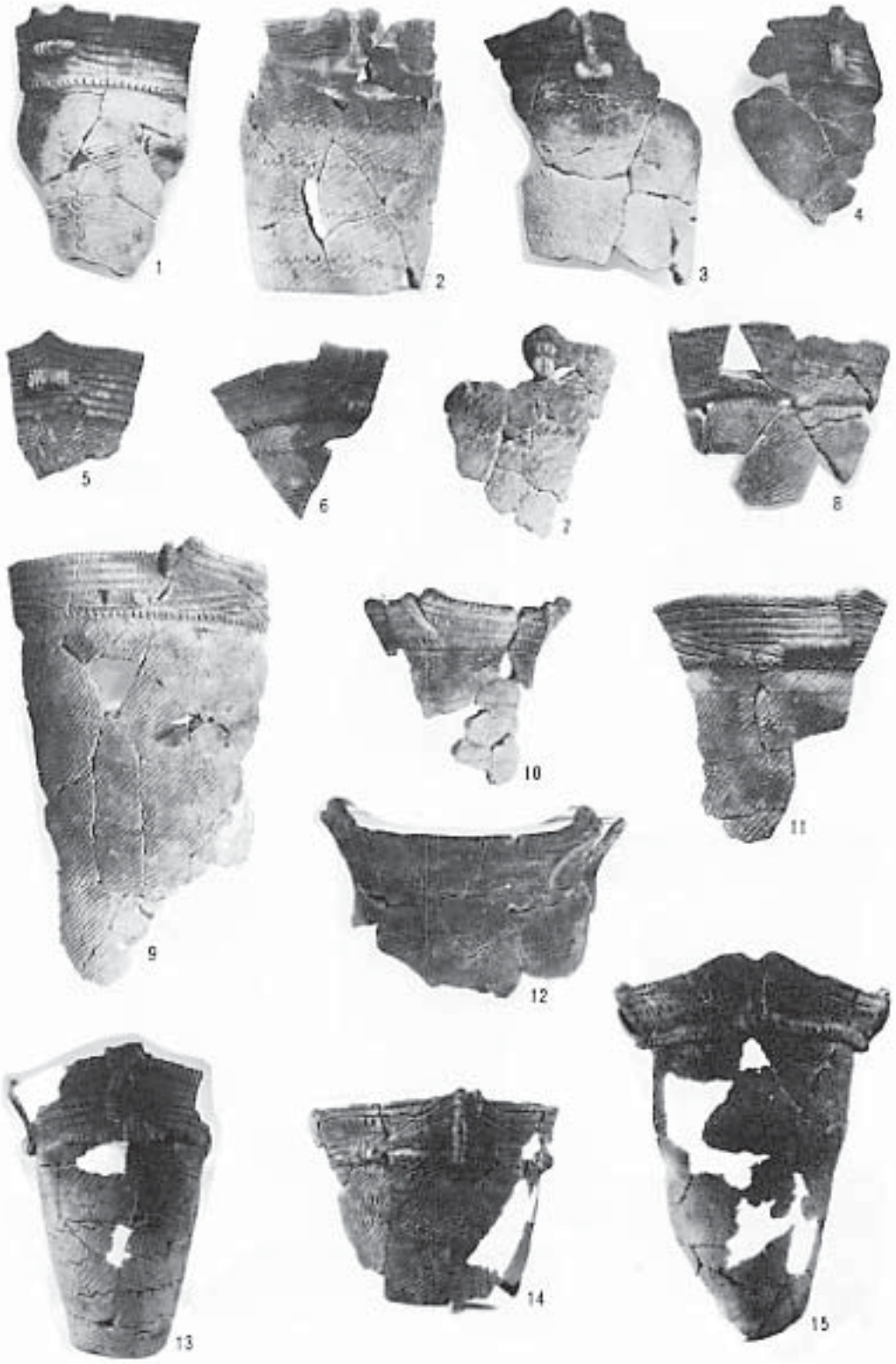


PL 6　第10－14・16・17号埋設土器、第Ⅰ群土器

PL 7　第Ⅰ群、第Ⅱ－１類土器

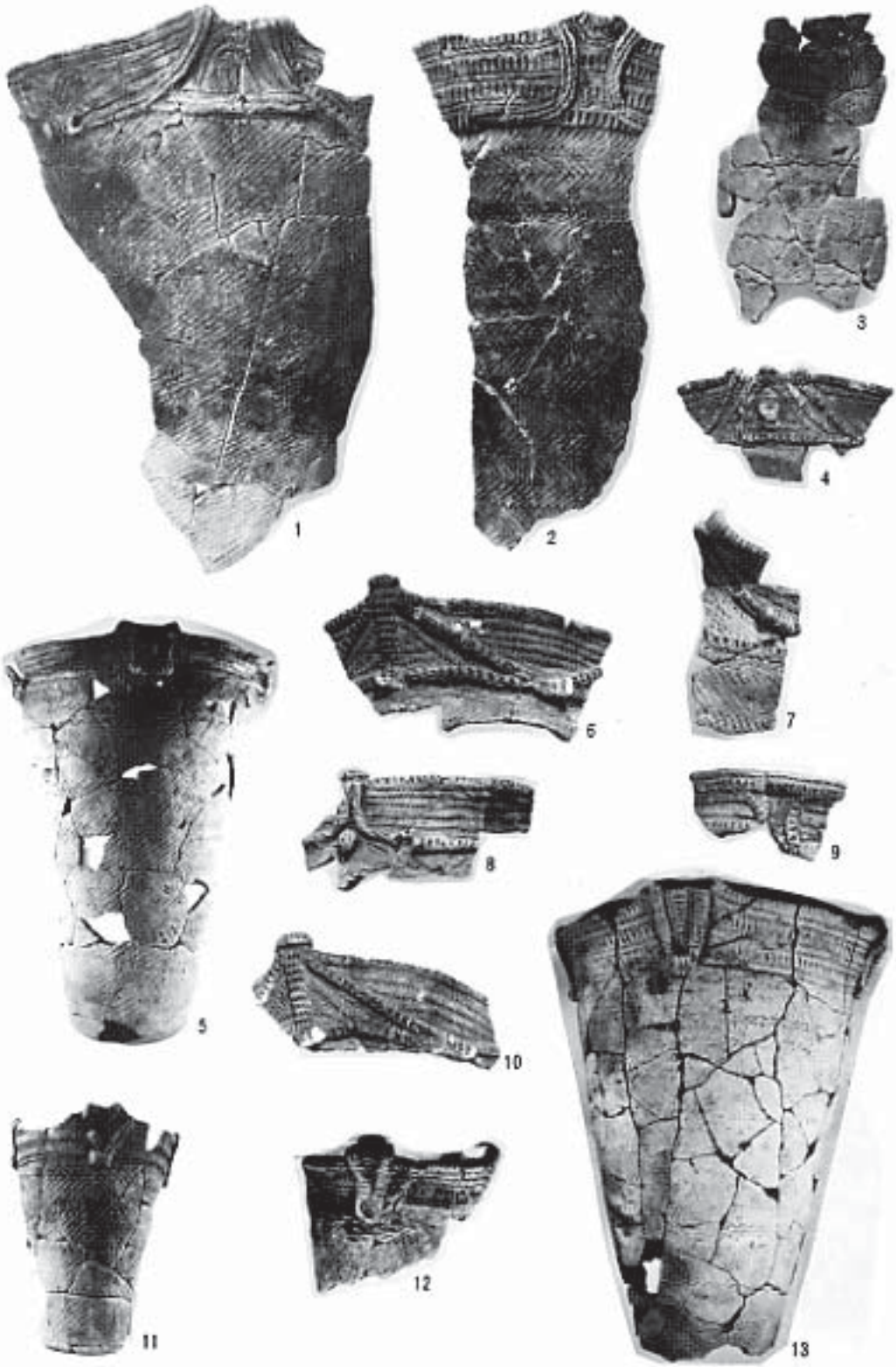


PL 8　第II－1類土器



PL 9　第Ⅱ－1類土器

PL10　第II－1類土器

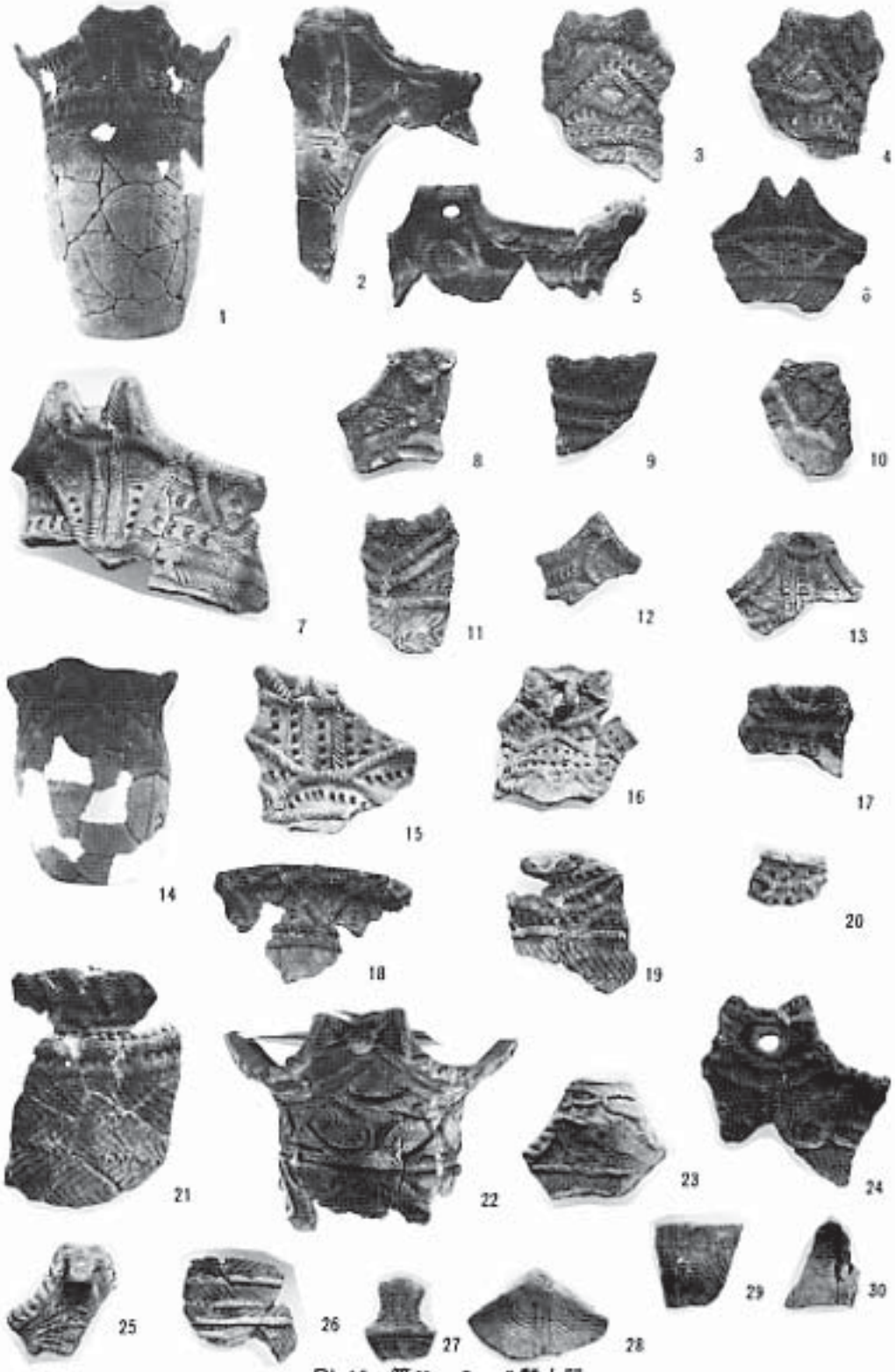


PL11　第II－1類土器

PL12　第II－I類土器

PL13　第II－1類土器

PL14　第II－1類土器

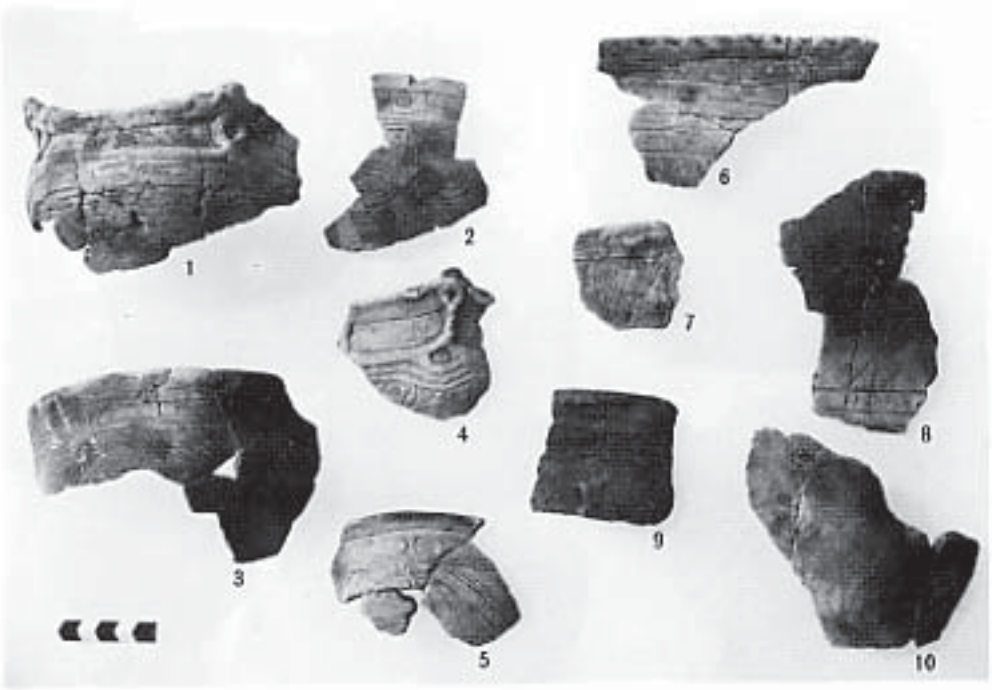


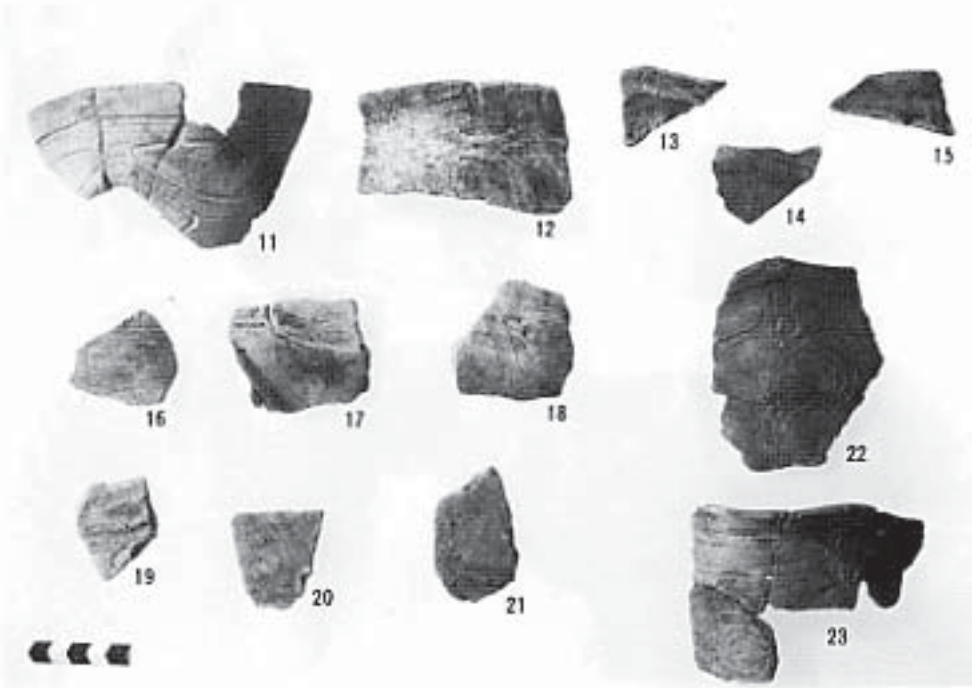
PL.15　第Ⅱ－2～6類土器

PL.16 第Ⅲ群土器 第1類(1)・第2類(2－4)・第3類(5)・第4類(6－10.13)・第5類(11－12)

PL.17　第III群土器　第5類(1～3)・第6類(4～5)・第7類(6～8)・第9類(9～10)・第10類(11～12)

PL.18　第Ⅲ群土器 第2類（1－4）・第3類（5－7・9）・第4類（8）

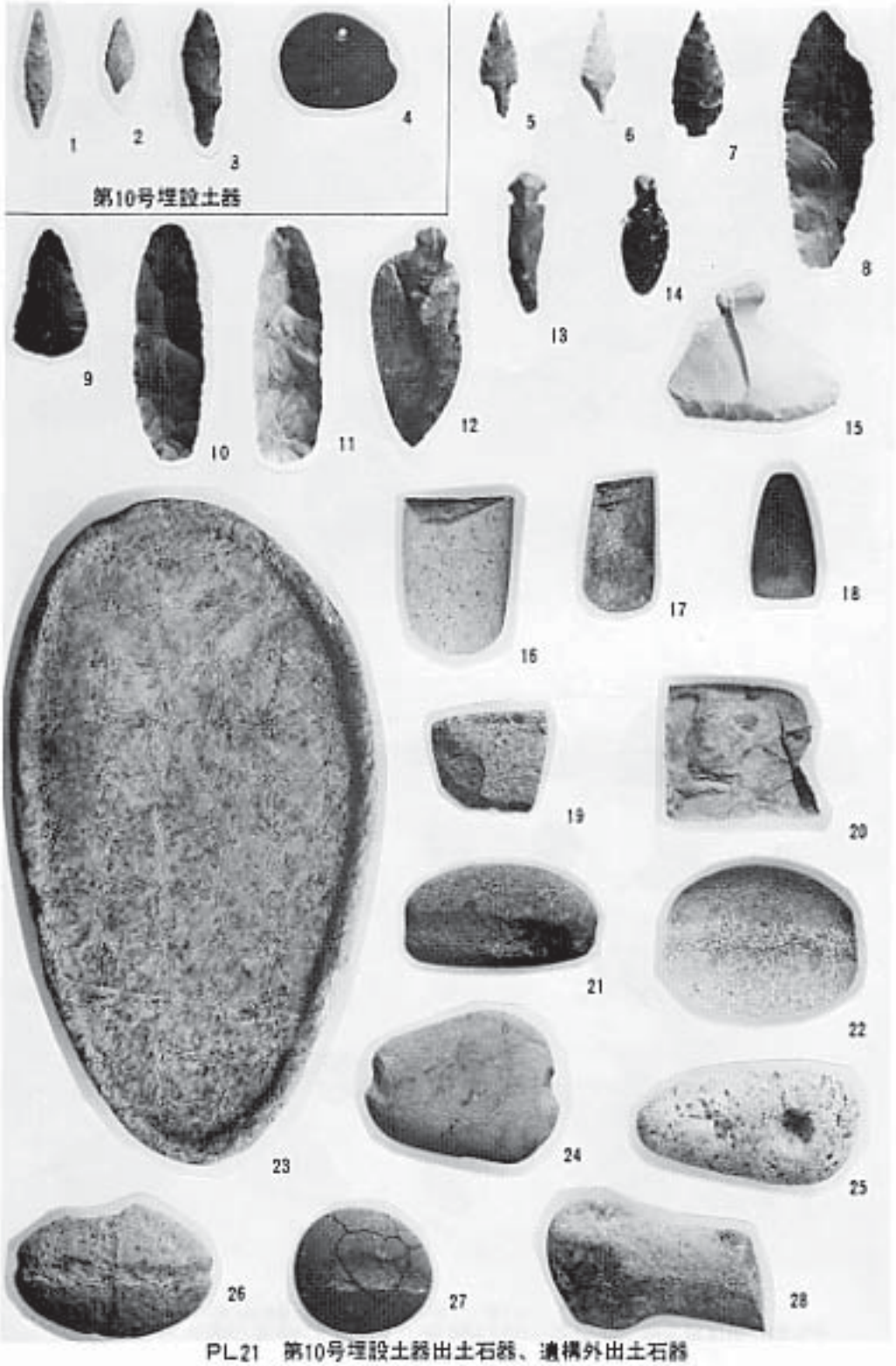




PL19　第III群土器　第4類(1－5)・第5類(6－10)
第7類(11－21)・第8類(22－23)

PL.20　第Ⅲ群土器文化遺物

第9類(1)・第10類(2～12)・三角形土製品(13～26)・円錐状土製品(27～31)・スプーン形土製品(32)・土偶(33～37)
動物形土製品(38)・きのこ形土製品(39)



PL.21　第10号埋設土器出土石器、遺構外出土石器

青森市の文化財 10
四戸橋遺跡調査報告書

発　行　日　：　昭和 58 年

発　行　者　：　青森市教育委員会